

近江産緑釉陶器をめぐる諸問題

高橋 照彦

I はじめに

III 緑釉陶器生産の技術系譜

II 論点の整理ならびにその検討

IV おわりに

論文要旨

平安時代における緑釉陶器生産地は、大きく畿内・東海・近江・防長の4地域に分かれる。前稿において筆者は防長地域を取り上げたので、緑釉陶器生産の全体像を明らかにするための次の作業として、本稿では近江地域を検討対象とした。本稿の主な検討結果を示すと、以下のようになる。

緑釉陶器窯での併焼品目：現状の資料を見る限り、灰釉陶器は生産されておらず、併焼されているのは須恵器のみである。また、緑釉瓦の生産も認め難い。

製品の特徴：近江産緑釉陶器は技術や形態などの基本的な面では東海産緑釉陶器とはほぼ一致していること、その一方で東海産緑釉陶器と比較すると、粗雑化傾向が強く、器形間の区別も不明瞭であるなど、より在地化が進行していること、という2点の特徴にまとめることができる。

器形の模倣対象：主要器種を構成する椀の一形態は、越磁ではなく金属製品を模倣していた点が指摘できる。10世紀以降の緑釉陶器生産においても金属器指向は認められるのであって、平安期の土器様式を「磁器指向」あるいは「磁器型」という一面のみで捉えるべきではなからう。

技術の系譜：畿内の伝統的技術とは明らかに異質であり、窯体構造を除けばすべて東海系の中で理解できる。作谷窯の窯体構造の成立経緯としては、いくつかの可能性は残されるものの、近江の緑釉陶器工人が近江在地内の瓦生産技術から分胎壁の構造を独自に取り入れ、緑釉陶器専焼にふさわしい形態へと改善させた結果ではないかと推測した。

生産の展開過程：緑釉陶器生産は10世紀前半代に開始し、10世紀後半には現在確認される3支群の窯が併存しつつ操業を行い、11世紀初め頃には終焉を迎えることになる。

製品の流通状況：10世紀前半頃まで畿内産緑釉陶器が主体であった地域において、それ以降近江産緑釉陶器が畿内産に取って代わることになる。そのため、畿内に代わる立場で緑釉陶器を生産することに近江の主な存在理由があったと推測される。

以上のいくつかの検討結果から近江の史的位を改めてまとめると、技術としては基本的に東海から導入するものの、生産は在地工人が主体となるものであって、その供給先としては畿内産緑釉陶器の位置を継ぐものであった。近江の緑釉陶器生産は、畿内・東海・近江の3者が組み合ったところに存立する生産であり、そこに近江窯成立の素因を見ることができると推測される。

I はじめに

日本古代における鉛釉陶器の生産は、他の国内窯業生産と異なり、釉原料の調達や調合が必要であり、施釉・二度焼きなどの工程も要するため、当時においては高度な、あるいは複雑な技術体系に属するものであった。それ故、奈良時代の段階までは、その生産技術が畿内の官営工房内で閉鎖的に保持されていたと推測されている。ところが、平安時代になると、生産内容がそれまで生産されていた三彩陶器から緑釉単彩陶器へと交替すると共に、生産地も畿外への拡散化現象を見せることになる。

現在知られている平安時代の緑釉陶器の生産地は、畿内・東海・防長・近江の4地域に大別される(図1)。畿内は、先述の通り平安時代以前から操業を行う伝統的な生産地である。窯は平安京周辺を中心に分布しており、大阪府茨木市の岸部窯跡群(1)、京都市左京区岩倉・北区西賀茂の洛北窯跡群(4)、京都市西京区大原野の洛西窯跡群(3)、京都府亀岡市の篠窯跡群(2)などがみられる。9世紀に入ってから新たに緑釉陶器の生産が開始されるようになるのが、東海と防長の2地域である。東海の緑釉陶器窯は尾張と美濃に確認され、名古屋市東部の、東山・天白・緑区や日進町・三好町などにまたがる猿投(山西南麓)窯跡群(6)、愛知県小牧市の尾北窯跡群(7)、岐阜県多治見市の多治見窯跡群(8)、岐阜県恵那市の恵那窯跡群(9)がある。防長については窯自体が未発見ながら、長門と周防に存在したことが確実である。

残された近江が、本稿で特に検討対象とする地域である(5)。この地域は、9世紀代の2大生産地である畿内と東海に挟まれた位置にあり、緑釉陶器生産も他の地域とは遅れて10世紀頃に開始している。本稿では、古代緑釉陶器生産の全体像を考えるための一作業として近江地域を取り上げ、近江の置かれた史的位置を考えてみることにしたい。

それではまず、近江産の緑釉陶器に関わる調査・研究を簡単に辿っておくことにする。近江の緑釉陶器窯は、既然大正年間に現在の蒲生郡日野町作谷においてその存在が確認されており、島田貞彦氏の報告により世に知られることとなった。また、1949年には八日市市土器町十禅谷において緑釉陶器窯が発見されており、その窯を踏査した際の所見が藤岡了一氏によってまとめられている。この頃までに知られていた緑釉陶器窯は、近江の他に畿内の岸部・洛北など2・3ヶ所程度であったから、近江は他の緑釉陶器生産地と比較しても早い段階で生産窯が明らかにされた地域と言える。その後、1973年に春日山の神窯で灰原の観察と遺物の採集がなされ、遺物の検討が行われている。しかし、窯跡の調査は全般的にはむしろ立ち遅れ、近江産緑釉陶器の研究は平安京跡などの消費地からの研究が先行するようになる。例えば、寺島孝一氏は平安京出土緑釉陶器を大きく3種に分類し、その一つを律令制崩壊以降の近江地方などからもたらされた一群とみなしている。1970年代以前は、近江を主体的に取り上げた研究がほとんど認められないものの、近江産緑釉陶器の輪郭については徐々に抽出されてきており、近江産緑釉陶器研究の第

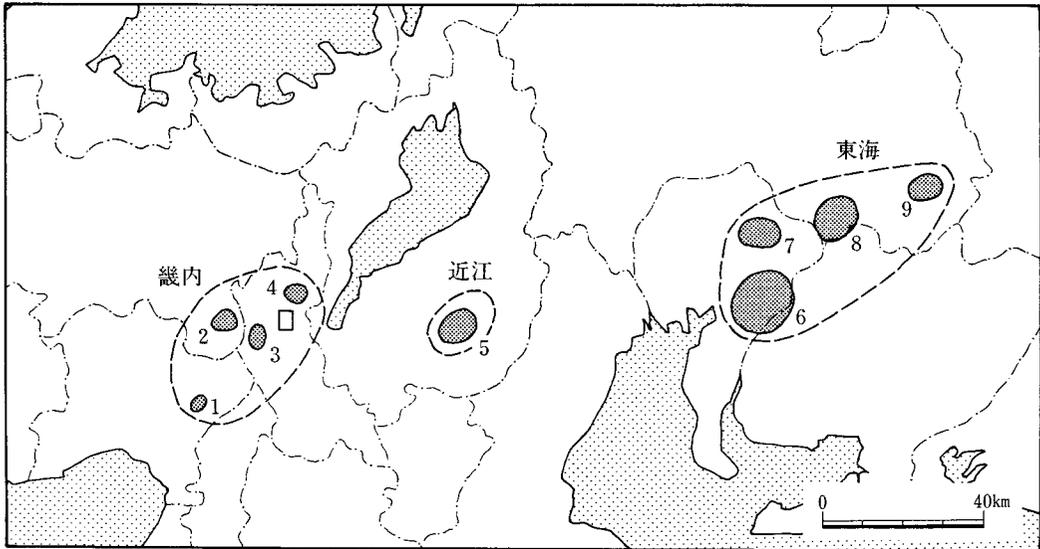


図1 平安時代における緑釉陶器主要生産地の位置

- 1：岸部窯跡群，2：篠窯跡群，3：洛西窯跡群，4：洛北窯跡群，5：蒲生窯跡群
6：猿投（山西南麓）窯跡群，7：尾北窯跡群，8：多治見窯跡群，9：恵那窯跡群

1段階と位置づけられるだろう。上記の他に1970年代以前の研究としては、文献史の立場から検討を試みた浅香山木氏の論考が挙げられる⁽¹¹⁾。ただし、既に指摘のあるように、用いられた文献資料は直接近江の緑釉陶器生産を考える材料にはならない⁽¹²⁾。

1980年代以降になると、峰道窯などいくつかの窯から採集された資料が報告されるようになり⁽¹³⁾、近江を初めとする消費地出土資料についても徐々に増加する。そして、ようやく1986年になり、先述の日野町作谷窯において初めて窯体本体の発掘調査も行われることになった⁽¹⁴⁾。遺跡調査の進展に伴い、1980年代も特に後半頃からは、近江の緑釉陶器生産に関する諸研究も次第に盛んになる。生産地を中心とするものでは松澤修氏⁽¹⁵⁾・百瀬正恒氏⁽¹⁶⁾・日永伊久男氏⁽¹⁷⁾・前川要氏⁽¹⁸⁾などによる検討があり、消費地を中心に生産地も含めた検討としては田路正幸氏⁽¹⁹⁾・森隆氏⁽²⁰⁾などの論考がみられる。その他にも、近江における古代窯業生産の概観の中で緑釉陶器生産に触れるものとして、丸山竜平氏⁽²¹⁾・大崎哲人氏⁽²²⁾などのものがある。それぞれの論考の内容についてはここで逐一触れることはしないが、近江産緑釉陶器の特徴がより明確化し、編年観に関しても研究者間でかなり共通の認識に達するようになってきたものと言える。もちろん、生産窯の調査が未だ少なく、細かな編年内容に関しては今後の課題とすべきところが少なくないが、編年の大枠については1つの到達点にあるものと判断される。

しかし、編年以外の側面は、各々の論考において簡単に言及されることはあっても、十分な検討のなされていない場合が多いように思われる。近江産緑釉陶器の研究も、1980年代からの近江産緑釉陶器の識別基準や編年の設定を主とした第2段階を経て、次のステップへと踏み出さねばならない段階に来ていると言って良からう。編年以外の研究が稀薄とは述べたが、既に編年以外で比較的まとまって検討を及ぼした研究もないわけではない。例えば、窯体構造などから技術の

系譜について検討した日永伊久男氏の⁽²³⁾論考や、椀類などの器形の模倣対象を推察した森隆氏の論⁽²⁴⁾考が挙げられる。ただ、詳しくは後述したいが、それらの諸論考についても問題が含まれていないわけではないと考えている。

このような研究現状を鑑みて、本稿では以下のような取り組みを行うことにした。まず第一に、研究を次の段階へと進めるためにも、近江の緑釉陶器生産をめぐる諸問題に関して、論点ごとに分けて現状における研究の到達点を再整理したいと考えている。その上で、これまでの研究において問題を含むと思われる部分について考察を試み、私見を示すことにする。もちろん、近江産緑釉陶器をめぐる問題点は少なくないわけであり、本稿でそのすべてについて考察を加えることはできないが、いくつかの論点についてこれまでよりも少しでも踏み込んだ検討を行うことを目指したいと考えている。

注

- (1) 田中琢「鉛釉陶の生産と官営工房」(『日本の三彩と緑釉』、五島美術館、1974年)。
- (2) 淡緑色釉が施された緑釉単彩陶器の成立は長岡京期頃であり、平安時代の初め頃に量産化傾向を辿ることになる。一方、いわゆる奈良三彩と呼ばれる三彩・二彩陶器などは平安時代の初期頃まで少量ながら生産が継続する。また、奈良三彩と新出の緑釉単彩陶器は器種構成も基本的に異なり、奈良三彩そのものが単色化したのではない。
- (3) 畿外への生産地の拡大は9世紀初め頃が最初で、その後次第に生産地が広がることになる。このような窯の拡散過程全般に関しては、別稿で検討を加えたい。
- (4) 畿内窯は、「京都」あるいは「平安京近郊」という呼び方がなされることもある。畿内窯という名称については、畿内窯に丹波の篠窯跡群が含まれるため、実のところ問題がないわけではない。ただ、摂津の岸部窯跡群なども加えて考えるため、「京都」という総称からも厳密にははずれてしまう。筆者としては、畿内で生産が行われたとみられる奈良三彩をも含め、奈良・平安時代の鉛釉陶器の生産地群として、「畿内」という名称を冠することにしたい。防長窯についてはこれまで「長門」と呼ばれていたものに相当する。前稿でも触れたように長門と周防を含めた生産地群として狭義の長門と区別するために「防長」という総称を与えた。東海については、防長と同様に「濃尾」などという名称を与えることも可能であろうが、既に「東海」という用語が定着しており、総称としては問題がないので、それを用いた。拙稿「防長産緑釉陶器の基礎的研究」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集、1993年)。
- (5) 一般的には、本稿で用いる多治見と恵那とを合わせて「美濃」あるいは「東濃」という呼称が用いられている。今後、多治見と恵那の間の地域で調査が進展し、緑釉陶器窯が発見される可能性が残されるが、少なくとも現状の窯跡の分布としては多治見と恵那では距離としてかなり離れており、別の窯跡群名で呼ぶのがふさわしいであろう。
- (6) 各生産地の製品については、現在「産」「系」「型」の3種の呼称が用いられているが、本稿では「産」の用語を使用することにした。3種の呼称のいずれを採るかについては、これまでの諸論文内では必ずしも定義付けされていない場合が多く、また指し示す内容としてもほぼ一致しており、いずれを用いようとも大きな問題はないようである。緑釉陶器関係の研究においてはほぼ唯一この呼称方法に言及しているのが、森隆氏である。森氏は「型」「系」を使い分けるべきだとして、「数郡から一国程度までの地域生産単位を「型」と想定し、一国から数ヶ国に及ぶ共通の生産系列と技術系譜については、これを「系」として統括」し、さらに「単に生産地名を示す」「産」の使用は排除している。そして、結論的には「東海系」「京都系」「近江系」「長門系」を4つの生産系とし、本稿において窯跡群として記したものを「系」の下位レベルの「型」とみなす。ただ、「型」は研究史的伝統がないため「窯」などと呼ぶことにしている。この森氏の呼称方法は、明記されていないものの、生産窯が必ずしも明確でない土器(土師器や黒色土器など)の生産を念頭に置き、それとの整合性を考えた名称であろうと思われる、もしそうだとすればその設定意図には問題はないだろう。ただし、筆者は前

- 稿でも触れたように「系」を技術系譜を示すものとして用い、その製品の産地とは切り離すことにしたいと考えているため、それと区別する意味で「産」を用いておきたい。また、緑釉陶器生産の場合、具体的な窯場がほぼ判明することから、森氏の「系」などを基本的に「産」で置き換えたとしても問題は少ないであろうし、流通の問題を論ずる上でも「産地名」とした方が理解しやすいであろう。なお、各窯跡群の単位をいちように「型」として捉えることは、現時点ではその識別が困難な場合が多く、問題を残しているだろう。森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」(『考古学雑誌』第76巻第4号, 1991年), 拙稿「防長産緑釉陶器の基礎的研究」前掲註(4)。
- (7) 島田貞彦「近江国蒲生郡に於ける窯址特に釉薬陶器に就て」(『考古学雑誌』第10巻第3号, 1919年)。
- (8) 藤岡一「奈良・平安時代の施釉陶」(『世界陶磁全集』第2巻, 河出書房, 1957年)。
- (9) 丸山竜平・山口利彦「甲賀郡水口町春日山の神古窯跡調査報告」(滋賀県教育委員会『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』, 1975年)。
- (10) 寺島孝一「平安京出土の緑釉陶器」(『考古学雑誌』第61巻第3号, 1976年)。
- (11) 浅香年木「平安期の窯業生産をめぐる諸問題」(『日本古代手工業史の研究』, 法政大学出版局, 1971年)。
- (12) 浅香年木氏は、近江国愛知郡の香荘に「雑器役」がみられることに着目し、この雑器を緑釉陶器あるいは須恵器などと判断して、荘園制的な分業関係に組み込まれて転換期を迎える姿を読み取ろうとした。しかし、浅香氏が推測したような「香之庄東方の愛知山西麓一帯が、十禅谷窯址に中心をもつ窯業生産地帯の北辺に連なっていた可能性」については、緑釉陶器窯がむしろ蒲生郡側に存在するので確認し難いと言わざるを得ない。また、香荘の成立時期は長治元年(1104)であり、明らかに緑釉陶器や須恵器の生産が終焉を迎えた後である。このことから、少なくとも上記の雑器に緑釉陶器を当てることはできないであろう。したがって、この文献から近江の緑釉陶器生産が荘園制的な生産体制によるものだと想定することもできない。なお、丸山竜平氏は既にこの雑器を須恵器などとは考えられず、木器ではないかと推測している。丸山竜平「滋賀の古代窯」(『日本やきもの集成』6<近畿I>, 平凡社, 1981年), 同「緑釉陶器窯の出現」(『八日市市史』第1巻, 1983年)。
- (13) 松澤修「水口町峰道1号古窯跡出土の遺物について」((財)滋賀県文化財保護協会『滋賀文化財だより』No.39, 1980年)ほか。
- (14) 滋賀県日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第6集(1989年)。
- (15) 松澤修「水口町峰道1号古窯跡出土の遺物について」前掲註(13), 同「日野町金折山古窯跡付近出土の緑釉陶器類の紹介」(滋賀県埋蔵文化財センター『滋賀埋文ニュース』第55号, 1984年), 同『近江出土の施釉陶器 実測図集成Ⅱ』(滋賀県近江風土記の丘資料館, 1988年), 同「八日市市十禅谷古窯跡出土の緑釉陶器について」((財)滋賀県文化財保護協会『滋賀文化財だより』No.130, 1988年)。
- (16) 百瀬正恒「近江国における緑釉陶器の生産(1)―中山作谷窯を見学して―」(中世土器研究会『中世土器研究』第44号, 1987年)。
- (17) 日永伊久男「近江産緑釉陶器の生産体制について」(『中近世土器の基礎研究』Ⅳ, 1988年), 同「近江の緑釉陶器生産」(三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館『緑釉陶器の流れ』, 1990年)。
- (18) 前川要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」(『古代文化』第41巻第5号, 1989年), 同「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究―様式の形成とその歴史的背景―」(『古代文化』第41巻第8・10号, 1989年)。
- (19) 田路正幸「近江産 緑釉陶器の一様相」(滋賀考古学論叢刊行会『滋賀考古学論叢』第2集, 1985年)。
- (20) 森隆「近江地域出土の古代末期の土器群について」(『中近世土器の基礎研究』Ⅳ, 1988年), 同「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲註(6)。
- (21) 丸山竜平「滋賀の古代窯」前掲註(12), 同「緑釉陶器窯の出現」前掲註(12)。
- (22) 大崎哲人「滋賀県における古代窯業生産の展開」(京都教育大学考古学研究会『史想』第21号, 1988年)。
- (23) 日永伊久男「近江産緑釉陶器の生産体制について」前掲註(17)。
- (24) 森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲註(6)。

Ⅱ 論点の整理ならびにその検討

近江における緑釉陶器生産をめぐる主な問題としては、1 窯跡の分布、2 生産の内容、3 編年、4 製品の流通、5 技術系譜、6 製品の消費形態、7 生産体制、8 生産の史的背景、などが挙げられるだろう。このうち、5については、次章で詳しく検討を試みるので、本章では触れない。また、6～8に関しては、これまでの研究では言及するにとどまるものがほとんどであるため、非常に重要な問題ながら本稿では触れず、機会を改めて検討したい。それでは、1～4の諸点について順に再整理ならびに検討を試みることにする。

(1) 緑釉陶器窯とその分布 (図2)

近江の緑釉陶器窯としては、十禅谷窯⁽¹⁾・作谷窯⁽²⁾・梶田窯⁽³⁾・山の神窯⁽⁴⁾・峰道窯⁽⁵⁾、それに詳細不明ながら黒丸窯⁽⁶⁾・金折山窯⁽⁷⁾・春日北窯⁽⁸⁾が挙げられる。このうち梶田窯は、これまで緑釉陶器窯として取り上げられてこなかった遺跡であるため、ここで若干説明を加えておくことにする。梶田窯は日野町大字中山字梶田に所在し、発掘調査された作谷1号窯の南南東約800mに位置している。以前、中山北窯跡と呼ばれていたものに相当する。日永伊久男氏は、この窯に対して「県内でも数少ない平安時代の須恵器窯跡」として把握していた。確かに、現状では採集遺物が少なく、施釉品や色見・トチン類は確認されていない。しかしながら、採集されている資料には、施釉されていないものの、形態上緑釉陶器の素地と考えられる個体が含まれており(図3—1・2)、緑釉陶器と須恵器(同一3・4)の併焼窯であったと考えるべきである。そこで、本稿では新たに緑釉陶器生産窯に含めることにした。

上に掲げた緑釉陶器窯は、滋賀県八日市市、蒲生郡日野町、甲賀郡水口町に分布している。これらに対する窯跡の群分けとしては諸説があり、いまだ十分に定まっていない。例えば、前川要氏は、水口古窯跡群(甲賀郡水口町春日周辺)・日野古窯跡群(蒲生郡日野町周辺)・八日市古窯跡群(八日市市土器町周辺)の3つに分ける説を採っている⁽¹¹⁾。また、百瀬正恒氏は、八日市市の窯を除いた上記2つの地域を合わせて水口丘陵古窯跡群と命名しており、その中で水口町春日・山の神支群と日野町作谷支群に分けている⁽¹²⁾。さらに、森隆氏は近江窯としてすべてを一括して捉えているようである⁽¹³⁾。

上記の諸説はグルーピングとしては各々に妥当なものであり、また必ずしも相矛盾するものでもない。問題となるのは、どのレベルを窯跡群としてグルーピングするか、だけであろう。まず、水口町の窯と日野町の窯は近接しており、同じ丘陵に分布していることから、1つの窯跡群として捉えるのが適当であろう。残された八日市市域の窯だが、確実なものが十禅谷窯の1基のみであり、確かに他の窯とはやや距離が離れている。ただ、日野町の窯からも7～8km程度で、同じ蒲生郡域に含まれていたとみられ、近江以外の緑釉陶器生産地域と比較すれば1つの窯跡群と



図2 近江における緑釉陶器窯の分布

- 1: 十禅谷窯, 2: 黒丸窯, 3: 金折山窯, 4: 作谷窯, 5: 梶田窯,
6: 春日北窯, 7: 山の神窯, 8: 峰道窯 縮尺 1/100,000

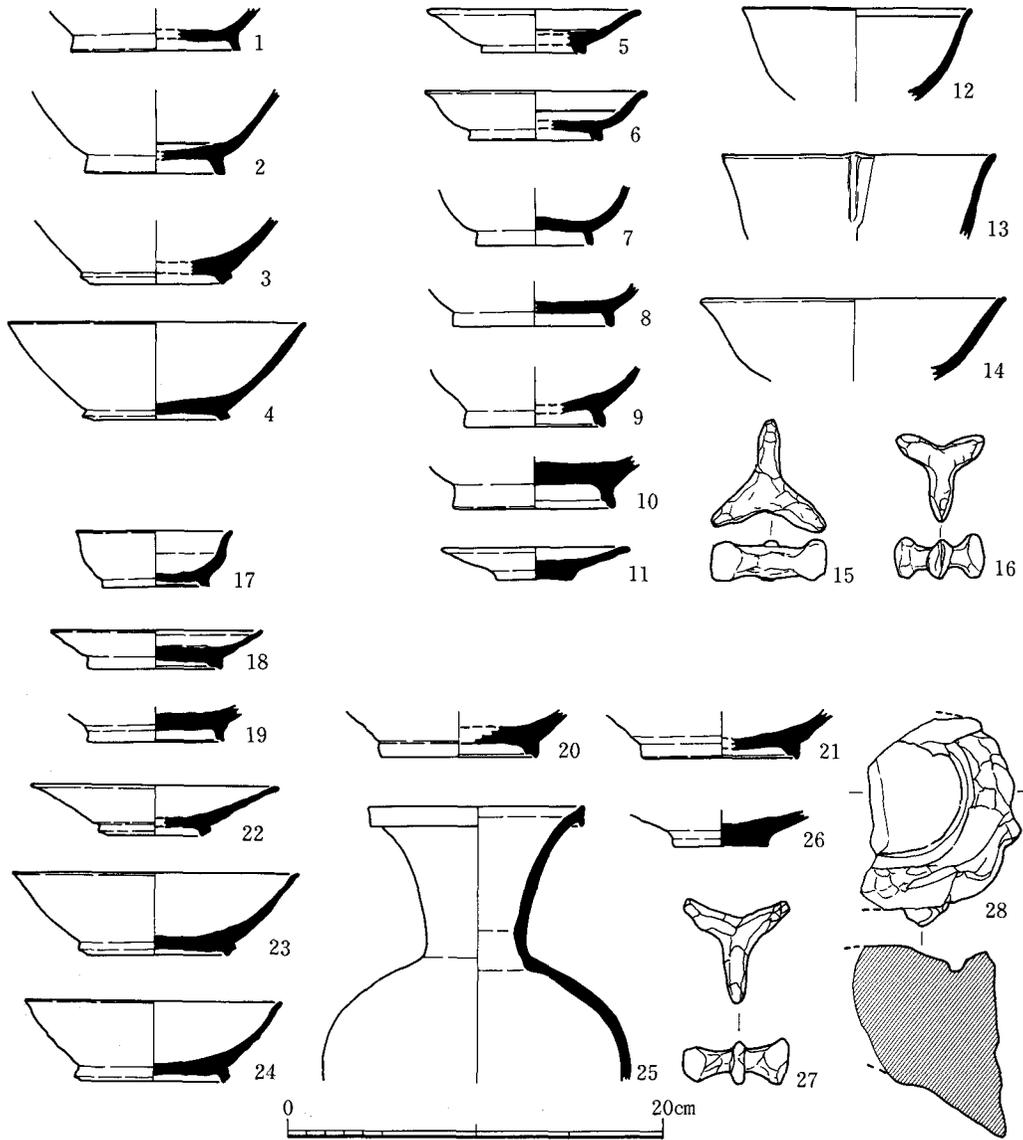


図3 近江における緑釉陶器窯出土資料(1)

1～4：梶田窯，5～16：十禅谷窯，17～28：山の神窯 縮尺 1/4

して捉えられるものと思われる。また、窯の生産内容としてもほとんど差異が見られないようであり、今後とも発見される窯の増加が予想されることから、1つの窯跡群としてまとめて扱っておいても良いのではなかろうか。これまでに確認されている緑釉陶器窯を1つの窯跡群と捉えるとすれば、その下位単位としては、愛知川と日野川に挟まれた布引山（あるいは八日市）地区〔十禅谷窯，黒丸窯〕と、日野川と野洲川に挟まれた水口（丘陵）地区とに2分され、後者がさらに支谷の差により日野町の中山支群〔金折山窯・作谷窯・梶田窯〕と水口町の春日支群〔春日北窯・山の神窯・峰道窯〕というように分けられるであろう。なお、現在の近江の緑釉陶器窯全体を包括する窯跡群の名称としては、種々の命名が可能であろうが、本稿では仮に蒲生窯跡群と

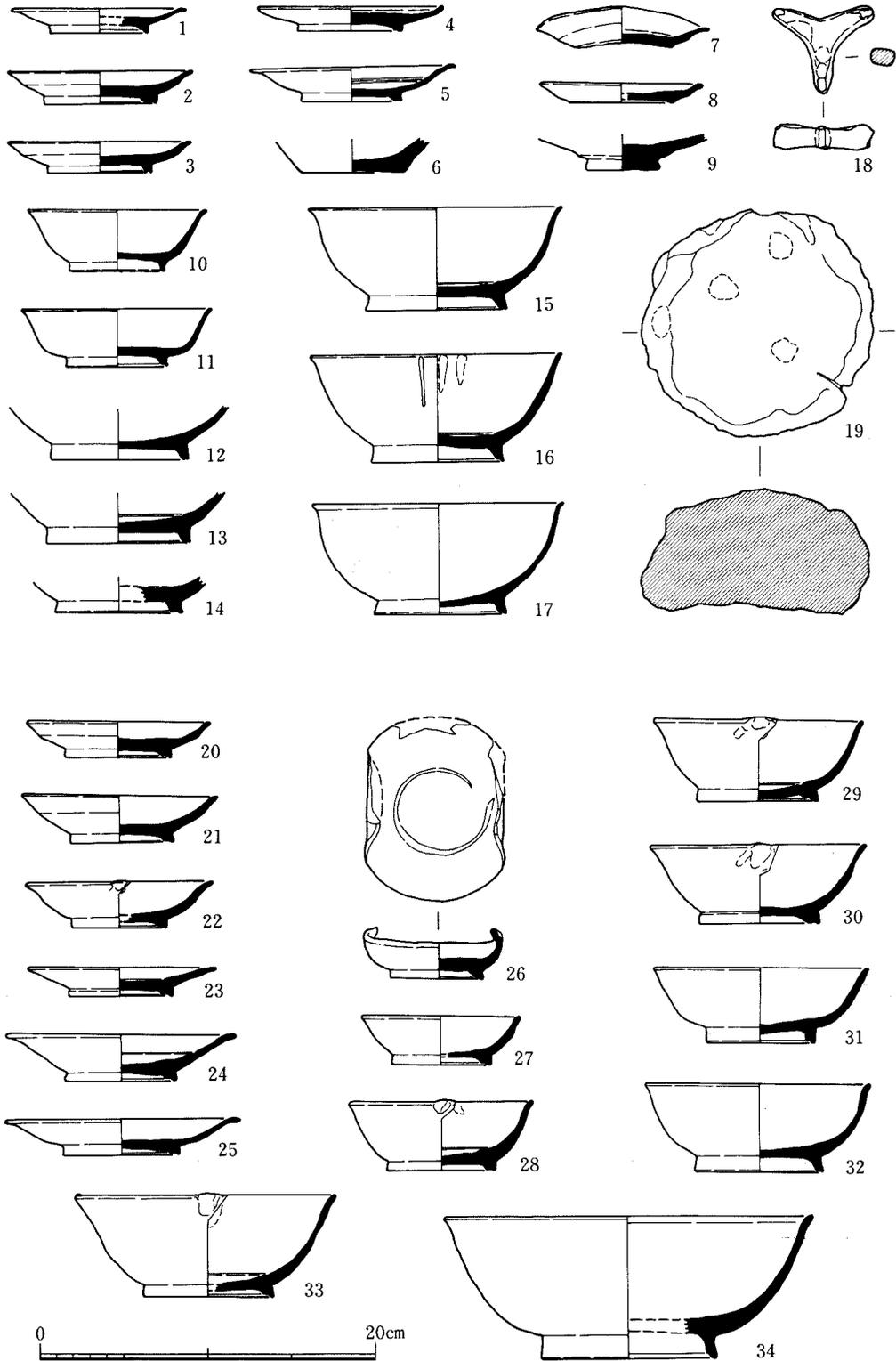


図4 近江における緑釉陶器窯出土資料(2)

1~19: 作谷窯, 20~34: 峰道窯 縮尺 1/4

呼ぶことにしたい。⁽¹⁴⁾

各支群ごとの窯の展開過程に関しては、これまでのところ生産遺跡の確認が少なく、将来的に窯跡数の増加が予想されるため、今後の調査成果を待たざるを得ない。ただし、本章の編年の項で触れるように、少なくとも10世紀後半頃の生産の最盛期前後では、3つの支群が併存しながら操業を行っていたものとみている。これ以上の分布論的な細かな検討を行うには、現在確認されていない地域での窯跡の有無や現在知られている窯の実態などを把握することが前提となるため、それらはこれからの課題となろう。

(2) 緑釉陶器窯の生産内容

a 灰釉陶器生産の有無

まず問題としたいのは、近江の緑釉陶器窯で灰釉陶器が生産されていたかという点である。従来から、山の神窯出土品には灰釉陶器が含まれていると認識されてきた⁽¹⁵⁾ (図3—22～25)。しかし、既に前川要氏などの指摘にあるように、それらは灰釉陶器ではないと見るべきである。その根拠としては、上面のみに不均質に釉が付着しており、意図的な施釉とみられないことや、山の神窯出土品と同種の形態のものが他の窯や消費地で出土しており、それらには明らかに灰釉が施されていないことなどが挙げられる。この他には、作谷窯の灰原上層から灰釉陶器の出土があげられるが、それは1点のみの小破片であり、この窯での生産を考えるべきではなかろう。このように、近江の緑釉陶器窯において灰釉陶器の生産は現状では確認できない。なお、前川氏は山の神窯出土の長頸瓶の釉は、実見した結果「薄い緑釉であることが判明した」とされているが、釉が全面に認められるのではなく、口頸部内面と肩部外面に顕著であることから、長頸瓶についても自然釉とみるべきであろう。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

この従来灰釉陶器と呼ばれていたものに対する名称についてだが、森隆氏はそれらを湖東型の無釉陶器と呼んでおり、前川要氏などもその用語を継承しているようである。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾確かに、碗皿類は特徴的な高台を持つことなどから明らかなように、灰釉陶器を模倣したものであろう。しかし、この場合、同じ形態の在産施釉陶器があって、無釉の製品として施釉品と対比させる必要上「無釉陶器」と呼んでいるわけではない。また、焼き上がりも中世の焼き締め陶器や古代の灰釉陶器と類似するわけではなく、基本的にあくまで須恵器の範疇に含まれる青灰色の色調を持っている。したがって、技術的にみてそれらはむしろ須恵器と呼ぶべきであり、灰釉陶器模倣の在産須恵器という位置付けが適当である。⁽²⁰⁾

b 近江産緑釉陶器の特徴

近江産緑釉陶器を識別する上での諸特徴については、先述したようにかなり意見の一致を見ているものと思われる。ただし、必ずしも網羅的に言及されているとは言えないので、私見も交えながら、近江産緑釉陶器の主体をなす碗皿類の特徴を以下に列記しておくことにしたい。

1 成形—ロクロからの切り離しが回転糸切りであり、高台を持つものは、貼り付け手法による。

- 2 調整—大型の椀（鉢）などにはヘラケズリが認められるが、ほとんどの個体はナデのみである。底部に糸切り痕を残す個体が多い。また、器表面には基本的にミガキを施さない。
- 3 装飾—輪花手法がみられる。口縁部の輪花には切り欠くものと押圧するものがあるが、前者は少ない。体部にも細長く縦方向に、押圧により輪花を作り出すものがある。陰刻による具象的な文様を持つものは認められないが、底部内面に圏線を持つものは目立つ。また、緑彩のものもは確実な例を聞かない。
- 4 焼成方法—1次焼成は直接重ね焼きを行い、2次焼成で三叉トチンを用いる。焼台としては、いわゆる馬爪形焼台を用いる。また、口縁端部に釉だまりが認められる個体があり、製品を倒置して、いわゆる伏せ焼きを行うことがあったものとみられる。
- 5 色調・胎土—素地は赤褐色の酸化焰焼成のものから、青灰色の還元焰焼成のものまでであるが、白色の焼き上がりを示すものは少ない。また軟質のものがある一方、硬質のものもある。胎土は概ね精良だが、小砂粒を含むものがある。
- 6 釉—釉調は濃緑色を基本とし、釉層は比較的厚いものが多い。施釉範囲は、全面施釉と部分施釉の両者が存在し、時代が下ると後者が卓越する。

近江産緑釉陶器の椀皿類の必要条件としては、1の糸切り、貼り付け高台、4の三叉トチンを用いる重ね焼きが挙げられる。ただし、これらはいずれも東海産や防長産の緑釉陶器とも共通する特徴である。それと区別する上で、田路正幸氏や前川要氏を初めとする諸先学も指摘するよう⁽²¹⁾に、ミガキの欠如は重要なメルクマールである。ただし、近江の初期段階の製品にミガキがまったく施されていないかかは、不明とせざるを得ないのが現状であろう。東海産緑釉陶器にも10世紀段階以降ではミガキをほとんど施さない個体もごく少量ながら存在する点も注意する必要がある。近江産が東海や防長産と異なる点としては、部分施釉や底部糸切り未調整が目立つ点も挙げられる。しかし、それらが東海などで皆無とは言えず、逆に全面施釉であることや底部に糸切りが認められないことは近江産でないということを示さない。底部内面の圏線はこれまで近江産の特徴として挙げられてきたことの多かった特徴だが、東海の黒笹90号窯式などにも認められ、また逆に近江産でも持たない個体は少なくない。その他の要素としては、素地の色調や釉調が重要な判断基準となる。例えば、素地が酸化焰焼成で赤褐色を呈したやや硬質のものは東海ではほとんど認められない。ただ、同時期の東海産と色調や釉調が酷似する例もあり、窯の焼成状況により特異な例も生まれ得ることから、やはりそのみを重視することはできない。要するに、典型的な近江産緑釉陶器を中心にある程度の変異の幅を持つため、単純に1つの要素だけで産地の判断をすべきではなく、複数の要素から検討するのが望ましいであろう。

なお、上掲した以外にも、形態面として高台下端部のいわゆる段は確かに近江産に顕著に認められる特徴である。ただ、森隆氏なども指摘するように、段という形態だけならば防長産などにも類例がある。また、近江産においても時期的な変化があり、段を持たないからといって近江産ではないという判断はできない。形態について詳しくは、次項で述べることにする。

c 器形の分類

近江産緑釉陶器の器種構成としては、椀皿類が圧倒的多数を占め、その他の特殊器種が少くないという認識で間違いなからう。主体となる椀皿類の器形については、松澤修氏⁽²³⁾・百瀬正恒氏⁽²⁴⁾・森隆氏⁽²⁵⁾らにより分類が試みられている。

松澤氏は、椀類の高台形態について薄手で高いもの、やや厚手で高いもの、厚手で低く踏ん張るもの、凹線を設けず三角形のもの4種に分類しており、それが時間的な変化を表しているものとみている。また、椀の体部形態としても、腰部が余り張らない浅いものと、腰部が著しく丸く張り、球形に近い深みのあるものの2種の存在を指摘している。基本的にこれらの分類の大枠は、筆者としても妥当なものと考えているが、後で筆者なりの再分類を試みることにする。

百瀬氏は、椀を丸椀タイプの椀Aと杯形タイプの椀Bに分類している。しかし、その識別基準はやや不明瞭である。高台形態については、輪高台の内側に段の付くa高台と、輪高台で撥形に開き低い台形をし、接地面が凹むb高台、の2つに分けている。百瀬氏自身が指摘するように、前者は緑釉陶器の高台で、後者は須恵器の高台である。

一方、森氏は椀の器形をA～Cの3種に分類している。筆者もこの3分類は、本来の器形の系譜を考える上で適切だと考えている。ただし、付け加えるならば、生産の当初はともかく、時期が下ると各分類の形態差は明確なものではなくなり、おそらく製作者自身も十分に識別しながら作り分けをしていたかはかなり疑わしいであろう。むしろ、その点にこそ近江産緑釉陶器の特徴の一端が現れているものと判断されよう。

それでは、椀類の高台形態に関して、筆者も改めて4種に分類しておくことにしたい(図5)。松澤氏の分類とほぼ共通するが、近江と東海の区別の難しい高台形態としてa類を設定する。

- a類 高台の下端が平坦かややくぼむ程度で、ほぼ水平なもの。高台高は高めで、幅が狭い。
- b類 高台高は高めで幅が狭い点で、a類と共通するが、下端がやや内傾するもの。高台下端は、凹線が巡っていわゆる段状をなすが、ほとんど平坦面のものもある。
- c類 高台高が低く、幅が広いもの。高台下端はやや内傾し明瞭な段をなしている。
- d類 高台が断面三角形をなすもの。高台高は比較的高い。

これらは、概ねa類→b類→c類→d類の順に変遷していくものと考えられる。ただし、上記の各類は併存しながら量的に変化するものとみた方が良く、器形差も考慮する必要がある。⁽²⁶⁾なお、上記の分類は近江産緑釉陶器の典型的な高台形態に関する分類であって、この分類から外れる形態⁽²⁷⁾なども存在する可能性がある。

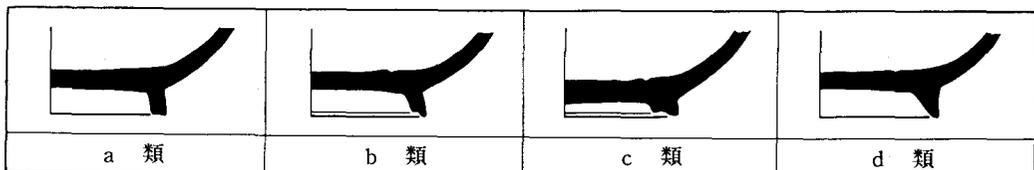


図5 近江産緑釉陶器椀類における高台形態の分類

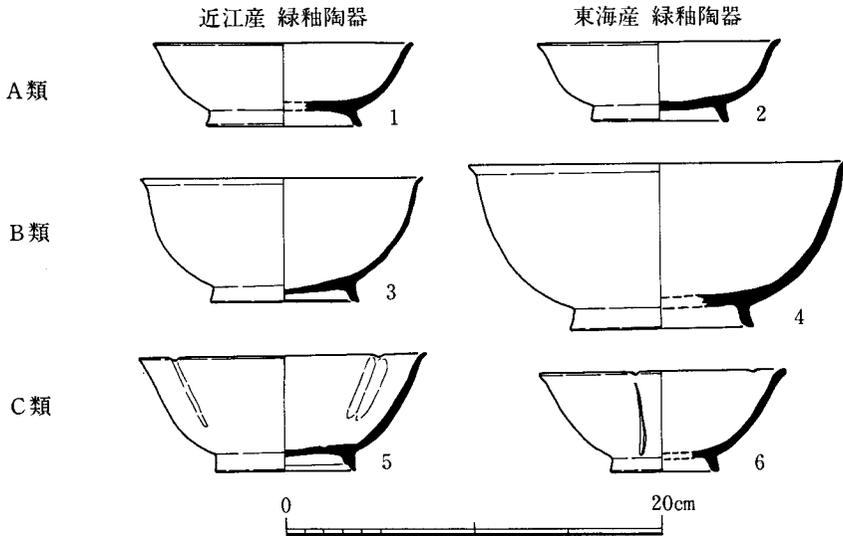


図6 近江産緑釉陶器碗類の器形分類

1：平安京右京二条三坊 SD 14， 2：北丘15号窯， 3：作谷窯， 4：篠岡100号窯，
5：平安京左京一条三坊（烏丸線立会17）井戸1， 6：東山72号窯 縮尺 1/4

碗の分類については、次の3種に区分する(図6)。森隆氏の見解をほぼ継承するが、灰釉陶器などの分類との対応も考えて、AとBの指し示す内容を入れ替えた。

碗A 腰の張りが強く、体部は内湾気味に立ち上がるもの。口縁部はわずかに外反する。高台径は大きい。森氏の碗Bに当たる。

碗B 腰の張りが強く、体部は直線的に伸び、深手のもの。口縁部はほぼまっすぐに終わるか、短く外反する。高台は比較的高い。森氏の碗Aにほぼ相当する。⁽²⁸⁾

碗C 腰の張りは弱く、体部は外傾気味に伸びるもの。口縁部は緩やかに外反する。口径に比して高台径は小さい。森氏の碗C。

東海産灰釉陶器のこれまでの分類との対応については、おおよそ以下のようになろう。碗Aが、⁽²⁹⁾ 檜崎彰一氏の碗B、⁽³⁰⁾ 若尾正成氏の碗Bに相当する。碗Bが、⁽³¹⁾ 前川要氏の深碗、若尾氏の碗Cに当たる。碗Cは、前川氏の輪花碗Bにほぼ相当する。これら各々の年代については、東海産施釉陶器との対応からみると、碗Aが猿投の折戸10号窯式(美濃の大原2号窯式)である NN-282号窯から出土がみられ、⁽³²⁾ 美濃の虎溪山1号窯式である北丘15号窯などからもまともに出土している。⁽³³⁾ 碗Bは、尾北の篠岡4'窯式(美濃の大原2号窯式)の篠岡100号窯から出土しており、⁽³⁴⁾ 碗Cは、猿投の東山72号窯式(美濃の虎溪山1号窯式)の標識である東山72号窯において確認できる。⁽³⁵⁾ この点からみても、森氏の指摘にあるように、⁽³⁶⁾ 碗A・Bが10世紀前半頃に、碗Cが10世紀後半頃に出現したものと考えてはば良からう。

d 模倣対象

次に、碗類の各器形がどのような対象を模倣することによって成立したかという点について取り上げたい。この問題に関しては、先に触れたように、既に森隆氏が細かく検討を試みている。⁽³⁷⁾

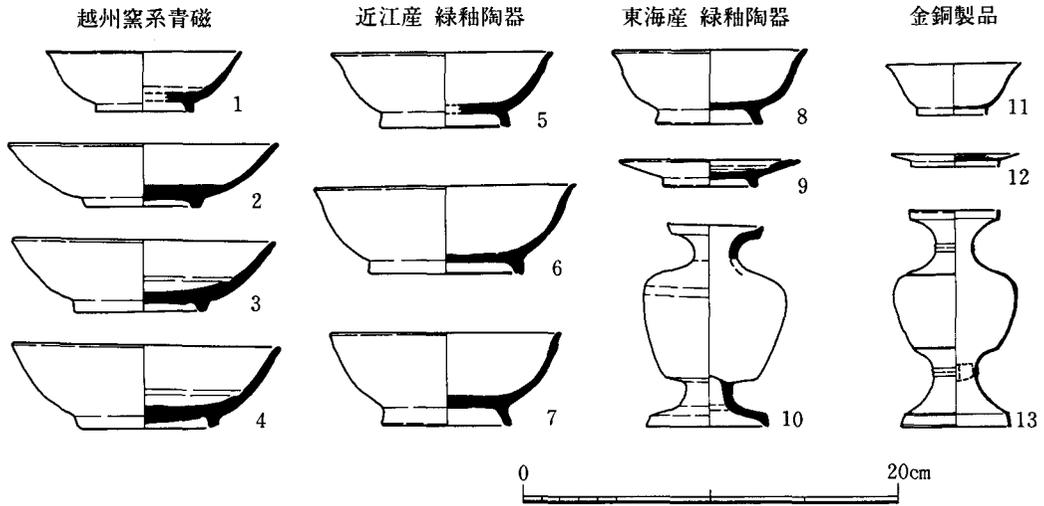


図7 近江産緑釉陶器碗Aの模倣対象

1：大宰府鴻臚館，2：大宰府史跡第74次 SD205A，3・4：大宰府鴻臚館第5次調査 SK56，
5：平安京右京二条三坊 SD13，6：吉田川西遺跡 SK128，7：内掘遺跡 SK01，8～10：北丘
15号窯，11～13：榎尾山2号経塚 縮尺 1/4

その結果、近江産緑釉陶器が基本的にはすべて越州窯系青磁に由来するものと結論付けられている。確かに、碗Cなどは以前から指摘されてきたように越州窯系青磁と酷似する形態を見いだすことができる。⁽³⁸⁾ただし、この時期の緑釉陶器をすべて青磁模倣として判断すべきかは検討を要するところであろう。

特にここで取り上げたいのは、先述の分類の碗A（森分類では碗B）である。この碗Aについて森隆氏は、越州窯系青磁の皿I—2類を模倣したものと判断している。⁽³⁹⁾また、碗Aの中には灰釉陶器の黒笹90号窯式の碗など9世紀にみられる器形の系譜を引くものを含む可能性があるため、将来的に細分される可能性もあると指摘している。

碗Aとして筆者が掲げたものは、腰の張りが強く、細く高めの角高台であることなどから、先述の後者のような黒笹90号窯式の灰釉陶器系譜の器形とはやはり区別する必要がある。⁽⁴⁰⁾問題は、碗A（図7—5～7）が越州窯系青磁の皿I—2類（同一1～4）の模倣とみられるかである。確かに、両者はまったく類似していないとは言えないものの、やはり相違点も目立つ。例えば、越磁皿の体部は緑釉陶器と比較して腰の張りが弱い。口縁端部も越磁皿はほぼまっすぐにおさめられているが、緑釉陶器は外反するものが多い。また、高台は越磁皿がかなり低いのに対し、緑釉陶器は古い段階ではむしろ幅が狭くやや高い。法量としても、越磁に比較して、緑釉陶器の方が口径に対する器高が高い。上記の相違点のうち、特に高台形態については注意する必要がある。近江産緑釉陶器では時期が下ると、高台の低い、いわば退化形態のものが出現することからも推測されるように、細く高めに高台を作ることは工人の意識的な模倣製作の所産とみるべきであろう。となると、本来の模倣対象は、やはり高台がかなり細く高いものであったはずであり、越磁皿の直接的な模倣から碗Aが生まれることは想定しにくいのではなかろうか。また、緑釉陶器

ではあくまで皿ではなく碗の新器形として取り入れているとみられることも、上記の森氏の想定に対して若干の疑念を抱く部分である。

そこで注目しておきたいのが、近江産緑釉陶器と酷似する東海産緑釉陶器（図7—8）である。この両者が共通の形態を持ち、それらが10世紀初め頃に出現する新器形であることから、本来同一品を模倣対象としていたと推測して間違いなからう。ここで美濃の北丘15号窯出土品を見てみると、この形態の碗は托（同一9）とセットをなしており、他にも花瓶とみられる瓶（同一10）の出土も確認される。これら碗・托・花瓶のセットは、総山遺跡など消費地においても認めることができ⁽⁴²⁾。そして、このセット関係は密教法具などの仏具としての構成なのである。和泉槇尾山経塚出土の金銅製品（同一11～13）などと比較すれば、それらの金属製仏具と緑釉陶器とは器形的にもかなり類似していることがわかるだろう。緑釉陶器がこのような金属器を模倣していたとすれば、先に指摘したような緑釉陶器において越磁と相違する点、つまり腰の張りや口縁端部形態、高台の高さや形、法量、さらには皿ではなく碗としての受容のあり方などほぼすべての問題が解消されるのである。

もちろん、上記の緑釉陶器が金銅製品とも厳密には若干形態が異なるのではないかという見解も予想される。図示資料は槇尾山の2号経塚に伴うとみられる資料であるが、その経塚の年代は12世紀前半とされており、実のところ緑釉陶器より時期的にはかなり新しい。言うまでもなく、同時期の資料との比較が好ましいが、現状では資料不足である点は否めず、槇尾山の資料で代用した理由もそこにある。ただ、それを補う意味で、伴出緑釉陶器から9世紀後半頃かと推測されている伊豆の修善寺裏山からの出土品を挙げておきたい⁽⁴⁴⁾。その中には、金銅製の花瓶や火舎、それに独鈷杵が含まれており、密教法具のセットであったとみられるものである。そのうちの金銅製花瓶は、口縁端部や脚端部が直立してやや長めに伸びるものの、北丘15号窯出土などの緑釉陶器ときわめて酷似した形態を採っている。具体的には、頸部や脚部の中位にみられる凸帯はなく、胴部の上端と下端にみられる段も存在しない。しかも、槇尾山例のように頸部や脚部が細長く伸びず、緑釉陶器ときわめて共通した形態となっているのである。このように、近い時期の資料では、より近似した形態のものを確認できる点は注目すべきであろう。残された碗や托については、10世紀代前後に遡る金銅製品を寡聞にして知らないため、それとの比較はできないものの、少なくとも槇尾山2号経塚出土例よりも時期が下る資料と比べれば、槇尾山例は緑釉陶器により近似している。槇尾山例でも十分に緑釉陶器と類似しているものと思われるが、花瓶と同様に、同時期には緑釉陶器にさらに近似した資料が存在した可能性は十分にあるだろう。このようにみても、東海産緑釉陶器ならびにその酷似形態を採る近江産緑釉陶器の碗Aは、やはり本来は金属製品の模倣であったと考えるのがふさわしい。

この仏具の模倣を裏付ける意味で付け加えておきたいのは、真言僧覚禪によって著された『覚禪鈔』と呼ばれる鎌倉初期の文献資料である⁽⁴⁵⁾。『覚禪鈔』によれば、請雨祈雨の修法の際には諸物を青色にすることが定められており、実際11世紀代などの修法では瓶や鉢として青瓷が用いら

れている。また、承元2年(1208)の段階では、「金銅の道具が最も優美であり、瓷器は甚だ莊嚴ではない」として、行法が無骨であるべきではなく、瓷器を用いるべきではないという趣旨の注申を公家に行う記載が見られる。これらの文献から、本来的な密教法具としては金銅製品が用いられていたが、祈雨といった特殊な用途では青瓷が用いられていたこと、そのような使い分けの意識も次第に変質していくこと、などが知られるのである。この「青瓷」の指し示す実態については、緑釉陶器であるとみられ⁽⁴⁶⁾、上記のような仏具形態の緑釉陶器の碗や瓶の存在とまさしく対応するものであろう⁽⁴⁷⁾。

このように、近江産緑釉陶器においても、少なくとも金属製品を模倣する例が認められるのであって、森隆氏の論のように10世紀以降の模倣対象を一元的に青磁あるいは磁器の模倣だけとして捉える観点には問題があることがわかるであろう。なお、上記の私論は、近江産緑釉陶器碗Aの形態的な模倣対象として、本来は仏具にみられるような金属器であったということを示すものであって、使用方法として仏具であったことまでを意味するものではない点を付記しておく。

(3) 編年

近江産緑釉陶器の編年に関しては、生産地・消費地の双方から既にいくつかの研究結果が提示されている。

生産窯の検討では、松澤修・前川要・日永伊久男の各氏などにより、十禅谷窯→山の神窯・作谷窯→峰道窯→(未発見窯)という変遷観が既に示されている⁽⁴⁸⁾。まずは、本稿において新たに緑釉陶器窯として位置づけた梶田窯の内容を検討してみることにしたい。緑釉陶器の素地(図3-1・2)は、焼き上がりが堅緻で、高台はやや踏ん張り気味に伸び、幅が細く高めである。高台下端部は、中央がややくぼむ程度の水平面であり、近江産に典型的な内傾する段を持つ形態ではない。つまり、先の分類ではa類に相当する。採集資料がきわめて少数である現状からの判断では問題も残すであろうが、いずれもa高台を持つ点からすれば、現在遺物の確認されている近江の緑釉陶器窯の中では最古段階に属する窯と考えられる。採集資料に含まれる須恵器(同一3・4)からみても、山の神窯出土品と比較すれば、直線的に立ち上がる体部を持つものであり、より古相を示すものであろう。ただし、緑釉陶器素地は底部内面には圏線が巡り、うち1つには底部外面に糸切り痕をとどめているなど、既に近江産に一般的な特徴も認められつつあることから、おそらく近江の開窯当初の段階まで遡る窯ではなかろう。

それでは、改めて本稿の高台形態の分類に従い、各窯の生産内容を確認してみることにしたい。結果は、表1の通りになる。a類からb類、c類、d類へと変遷することが想定されるため、従来の編年観ではほぼ妥当とみて良からう。ただし、付け加えておきたいのは、峰道窯の出土遺物に関してである。峰道窯の碗では、体部が大きく内湾し、腰の張りが強いもの(図4-31・32・34)と、腰の張りが弱いもの(同一27~30・33)の2種が存在する。前者は、基本的に細く高いb高台を持つのに対して、後者は、低く段の明瞭なc高台である。また、後者は口縁端部の押圧によ

る輪花があるが、前者では基本的に輪花がみられない。このように、峰道窯の資料には明確に分かれる2種の製品が生産されていたことになる。その位置づけとしては、前者の椀が十禅谷窯などで出土するものなどと類似しており、時期差を想定した方が

表1 各窯出土緑釉陶器の高台形態

	a 類	b 類	c 類	d 類
梶田窯	○			
十禅谷窯	○	○		
山の神窯		○	○	
作谷窯		◎	○	
峰道窯		○	◎	

凡例：◎主体的に出土 ○定量的に出土

良いようである。峰道窯では2基の窯が存在したものとみられていることから、上記の二者はその2基のそれぞれに伴うもので、2基の操業時期差を示すものであることが推測されよう。したがって、峰道窯採集品すべてに作谷窯に後出する10世紀末という年代的位置を与えることはできない。

近江の開窯時期に関しては、森隆氏が10世紀第1四半期に引き上げる見解を示している⁽⁵⁰⁾。その根拠とされた平安宮西限障23出土資料⁽⁵¹⁾は、筆者も近江産の特徴を備えるものと判断する。障23は、伴出土師器から大略平安京Ⅱ期新(900~930)頃に比定できるが、その遺構の性格などを考慮すると、第1四半期に限定できるかは議論の余地を残す。もう1つの根拠である大宰府Ⅷ期出土例⁽⁵²⁾についても、筆者の修正年代観からすると第1四半期以前とは絞れず、この点はもう少し資料の増加を待たざるを得ない。ただ、開窯を10世紀前半代に置くことは問題なからう。

次に、本稿では細かな検査を行わないが、上記の窯の変遷ならびにこれまでの消費地の研究成果を踏まえた上で、ごく簡単に編年をまとめておくことにする。

I 期 (10世紀前半)

この時期の窯としては、梶田窯が挙げられ、このI期から次のII期にかけての窯としては十禅谷窯がある。出土資料数としては限られ、生産量もまだそれほど多くはないものと推測される。椀としては、先の分類のA・B類があり、この他に皿・段皿などがみられる。高台形態はa類である。底部の糸切りをナデ消し、全面施釉するものが大半を占めている。釉調としては、次の段階よりもやや緑色が薄いものや黄色味を帯びたものが認められる。この段階の緑釉陶器窯では、灰釉陶器模倣の須恵器も生産されている。

II 期 (10世紀後半)

この時期は、古段階と新段階の2つに細分できる。緑釉陶器窯としては、山の神窯と作谷窯がII期でも古段階のものを中心に新段階にかけて操業し、峰道窯の主体のものが新段階に当たる。窯数が増加すると共に、生産量が増大し、最盛期を迎える。椀としては、新たに椀C類が登場する。しかし、それらの器形差もかなり不明瞭になっている。高台形態は、古段階ではb類が、新段階ではc類が主体であり、典型的な近江産緑釉陶器の高台形態を採っている。この他に皿や段皿・耳皿などがある。輪花手法はII期古段階を中心に縦に長く、外面から押圧を加える輪花が確認できるが、新段階では口縁端部のみを押圧するものが多くなるものとみられる。底部は糸切り未調整のものが目立つようになり、施釉範囲も底部外面に施さないものが少なくない。釉調は濃

緑色を呈するものが大半である。緑釉陶器窯で併焼される須恵器については、古段階では認められるが、新段階では減少するものとみられる。

Ⅲ 期 (11世紀初め)

この時期の資料は消費地では確認できるが、窯は現在までのところ発見されていない。碗・皿類の高台はd類形態を採っており、前段階でみられた高台下端面の段が消失する。皿類は口縁端部が外反せず、内湾気味に終わるものが多い。焼成はほとんどが軟質で淡赤褐色を呈している。基本的に糸切り未調整で、施釉も部分施釉のものが多いようである。釉調はやや褐色を帯びた濃緑色を呈するものが多い。須恵器の併焼は行われていないようである。

各支群ごとに窯の展開過程をまとめれば、Ⅰ期には、日野中山の梶田窯が確認できる。また、八日市の十禅谷窯ならびに水口春日の峰道窯の1基がこの時期に遡る可能性があり、Ⅱ期にかけての操業とみられる。Ⅱ期には、上記の十禅谷窯などの他、日野中山の作谷窯、水口春日の山の神窯・峰道窯のもう1基が操業を行う。従来、確認されている生産窯が少ないこともあり、一系列的な変遷観が示されていたが、少なくとも10世紀後半頃には各支群の窯が併存しながらほぼ同時に操業を行っていたとみるのが実態としてふさわしいであろう。

(4) 製品の流通

まず、製品の流通範囲については、森隆氏が宮城県の大賀城付近から宮崎県の学園都市遺跡にまで認められる点を指摘している⁽⁵⁵⁾。筆者の確認では、鹿児島県川内市の成岡遺跡⁽⁵⁶⁾や国分市⁽⁵⁷⁾の本御内遺跡からも近江産緑釉陶器の出土がみられるため、陸奥から薩摩・大隅とほぼ汎日本的に製品の分布を見いだすことができる。緑釉陶器の流通全体の中での近江の位置に関してはいまだ個別にデータを提示して検討されていないのが現状であり、その点については稿を改めて考察を加えたいので、ここでは結論的な内容のみを簡略に述べておくことにする。

まず、平安京の出土資料を見てみると、緑釉陶器の大半、筆者の試算ではほぼ9割が畿内産と近江産である。畿内産が主流であるのは10世紀前半頃までであり、一方の近江が10世紀前半に出現し、10世紀後半にほとんどを占めることになる。全国的な出土状況においても、例えば加賀では、9世紀代では約65%を畿内産、10世紀代では畿内産が30%弱と残るが、近江は約65%を占める⁽⁵⁸⁾。畿内産は10世紀も前半代までのものがほとんどで、10世紀後半以降に限れば、近江産が9割程度となる。また、西日本では例えば大宰府においては9世紀代で畿内産が約55%であるが、10世紀代では畿内産が20%以下に減少し、代わって近江産が約60%を占める⁽⁵⁹⁾。10世紀後半以降に限定すると、畿内産がほとんど認められなくなるため、近江の比率が高まる点は先の加賀の試算と同じである。このように、9世紀～10世紀前半まで畿内産が主に流通していた畿内以西を中心とした地域では、10世紀後半以降は近江産が畿内産に代わって大半を占めるという動きは間違いない。これらの流通状況は、畿内産緑釉陶器の占めていた役割が10世紀以降には近江により担われるようになったことを示すものであり、近江の存在理由を表していると言えるだろう。

また、近江産緑釉陶器の一大供給地は平安京とみられる。平安京への供給量とそれ以外の地域への供給量を比較することは難しいが、筆者が集計した全国出土の緑釉陶器のうち平安京出土品の占める割合は1/3以上はあるので、近江の供給量のかなりの部分が平安京に供給されていたことになるだろう。近江が平安京への供給を主目的にしており、さらに西日本にかけての地域へも主体的に流通していたと言えるだろう。筆者の試算では、10世紀以降の全国出土緑釉陶器のうち近江産は約6割を占めており、10世紀後半に限ればさらに比率を高めるだろう。10世紀後半以降の近江産の供給量の多さが窺われる。近江が10世紀代に急成長を遂げ、緑釉陶器生産の中ではかなりの量産化体制に移行した姿が読み取れるだろう。

なお、緑釉陶器窯で併焼された須恵器については、湖東地域では確認できるが、緑釉陶器の主要供給地である平安京での出土例は管見にない。緑釉陶器窯での併焼須恵器は明らかに窯の近辺地域への供給が目的であったことがわかる。近江の緑釉陶器窯で須恵器が生産された段階では、二層的な供給体制であったと判断され、そのようなあり方は篠窯跡群などでも確認できるものである。また、緑釉陶器が素地のまま、つまり施釉されずに流通することもごく少量ながらあったようであり、⁽⁶⁰⁾ これも在地向けの供給を主たる目的にしたものとみなされる。

註

- (1) 藤岡一「奈良・平安時代の施釉陶」前掲第1章註(8)、丸山竜平「緑釉陶器窯の出現」前掲第1章註(12)。
- (2) 島田貞彦「近江国蒲生郡に於ける窯址特に釉薬陶器に就いて」前掲第1章註(7)、京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部(1968年)、松澤修「日野町金折山古窯跡付近出土の緑釉陶器類の紹介」前掲第1章註(15)、滋賀県近江風土記の丘資料館『近江出土の施釉陶器 実測図集成Ⅱ』前掲第1章註(15)、日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第6集、前掲第1章註(14)。
- (3) 日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集(1985年)図版17—G 1、同『日野町内遺跡詳細分布調査報告書』昭和63年版(1989年)。
- (4) 滋賀県文化財保護協会『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』(1975年)、滋賀県近江風土記の丘資料館『近江出土の施釉陶器 実測図集成Ⅱ』前掲第1章註(15)。
- (5) 松澤修「水口町峰道1号古窯跡出土の遺物について」前掲第1章註(13)、滋賀県近江風土記の丘資料館『近江出土の施釉陶器 実測図集成Ⅱ』前掲第1章註(15)。
- (6) 八日市市教育委員会『八日市市内遺跡分布調査報告書』(1984年)。なお、布引丘陵においては詳細な分布調査もなされたが、7世紀後半から8世紀の須恵器窯は認められるものの、緑釉陶器窯については確認されなかったようである。八日市市教育委員会『昭和59年度埋蔵文化財調査報告書』(『八日市市文化財調査報告』(7)、1986年)。
- (7) 日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集、前掲註(3)。
- (8) 滋賀県教育委員会『昭和60年度滋賀県遺跡地図』(1986年)。
- (9) この他にも、栗東町付近に緑釉陶器窯の存在が推定されている。松澤修「八日市市十禅谷古窯跡出土の緑釉陶器について」前掲第1章註(15)。
- (10) 日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第6集、前掲第1章註(14)4・5頁。
- (11) 前川要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」前掲第1章註(18)。
- (12) 百瀬正恒「近江国における緑釉陶器の生産(1)—中山作谷窯を見学して—」前掲第1章註(16)。
- (13) 森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6)。
- (14) 蒲生窯跡群の他に、例えば、近江窯跡群、湖東窯跡群、日野水口窯跡群などという呼称が考えられる。このうち近江窯跡群という名称は、緑釉陶器生産に限るならば十分であるが、他の窯業生産の

窯跡群名と対置させる上で、近江国という広い範囲の名称を冠するのは必ずしも適当ではない。また、「近江」は滋賀県内では現在の坂田郡近江町の窯跡群と取られかねないため、やはり窯跡群名としては避けるべきであろう。湖東窯跡群も、琵琶湖の東の地域となり、指し示す範囲が広いため、「近江」と同様の問題がある。その点からすると、日野あるいは水口窯跡群という呼称は地域が限定されるため、名称としてはよりふさわしい。ただ、前川要氏の狭義の名称と混乱する可能性があり、「八日市」も含めた名称としてはもう少し全体を統括するような名称が好ましいだろう。そこで、現在の緑釉陶器窯が旧蒲生郡を中心に分布していることを考慮し、より包括的な名称として「蒲生」を冠することにしたい。もちろん、その呼称には現在の蒲生町のイメージが強く、蒲生町に属する窯が発見されていないことから問題がないわけではない。しかしながら、蒲生町の野瀬遺跡では、緑釉付着の三叉トチンが出土しており、蒲生町側に窯や製品の集積地が存在したことが想定されるため、「蒲生」を総称とすることもさほどの問題とは言えないと考えている。なお、この蒲生窯跡群として総称した地域には、7～8世紀、あるいは平安時代にかけての須恵器や瓦の窯跡も分布しており、本来それらを考慮した窯跡群の地区設定などをするのが適当であろうが、それは今後の課題であり、本稿の作業もあくまで緑釉陶器生産の実態を捉えるためのものである点を了解願いたい。緑釉陶器生産以前の蒲生の窯跡群については、滋賀県文化財保護協会の畑中英二氏から御教示を得た。御礼申し上げたい。蒲生町教育委員会『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅰ(1989年)。

- (15) 榑崎彰一「白い器とまつりの道具」(『日本陶磁全集』6<白瓷>, 中央公論社, 1976年)51頁, 同「平安時代の施釉陶一青瓷と白瓷」(『世界陶磁全集』第2巻<日本古代>, 小学館, 1979年)277頁, 丸山竜平「滋賀の古代窯」前掲第1章註(12), 同「緑釉陶器窯の出現」前掲第1章註(12), 日永伊久男「近江産緑釉陶器の生産体制について」前掲第1章註(17)ほか。
- (16) 前川要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」前掲第1章註(18)。
- (17) 前川要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」前掲第1章註(18)。なお、この山の神窯の資料に関しては、滋賀県埋蔵文化財センター 秋田裕毅氏・(財)滋賀県文化財保護協会 松澤修氏からも筆者と同見解である旨の御教示を得た。御礼申し上げます。
- (18) 森隆「近江地域出土の古代末期の土器群について」前掲第1章註(20), 同「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6)。
- (19) 前川要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」前掲第1章註(18)。
- (20) 既に、百瀬正恒氏は問題の椀・皿などを須恵器の可能性が高いとみており、松澤修氏も須恵器と表現している。百瀬「近江国における緑釉陶器の生産(1)―中山作谷窯を見学して―」前掲第1章註(16), 松澤『近江出土の施釉陶器 実測図集成Ⅱ』前掲第1章註(15)。
- (21) 田路正幸「近江産 緑釉陶器の一様相」前掲第1章註(19), 前川要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」前掲第1章註(18)ほか。
- (22) 例えば、多治見の白土原2号窯出土の椀なども、無釉であり、焼成や形態からも緑釉陶器素地とみられるが、ミガキは認められない。多治見市教育委員会『白土原1・2・3号窯発掘調査報告書』(1989年)図9-7。
- (23) 松澤修「八日市市十禅谷古窯跡出土の緑釉陶器について」前掲第1章註(15)。
- (24) 百瀬正恒「近江国における緑釉陶器の生産(1)―中山作谷窯を見学して―」前掲第1章註(16)。
- (25) 森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6)。
- (26) この時期の新器形はいずれも当初は高台が比較的高いものであり、旧来の椀系譜のものとは高台の形態の異なるものが併存する可能性が高い。
- (27) 例えば、平安京右京二条二坊出土の「天曆七」(953)銘が入った緑釉陶器椀は、産地不明ながら近江産の可能性が指摘されているものだが、その高台は断面がやや三角形を呈しており、上記の分類にはやや含めにくい。なお付記しておく、それは明らかにⅢ期に主体であるd類の高台形態とも同列に置くことができないものである。森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6), (財)京都府埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和56年度(1982年)。
- (28) 図示した資料は、体部の内湾が強いものだが、より直線的なものがむしろ一般的である。あるいは、細分することも考えられるが、本稿では両者をまとめておくことにしたい。
- (29) 榑崎彰一「日本出土の宋元陶磁と日本陶磁」(『国際シンポジウム新安海底引揚げ文物報告書』, 中日新聞社, 1984年)。
- (30) 若尾正成「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」(美濃古窯研究会『美濃の古陶』No.1, 1987

- 年)。
- (31) 前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相—瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして—」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ, 1984年)。
- (32) 名古屋市教育委員会『名古屋市緑区NN—282号窯発掘調査報告書』(『名古屋市文化財調査報告』Ⅻ, 1982年)。
- (33) 多治見市教育委員会『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』(1981年)。
- (34) 小牧市教育委員会『桃花台沿線開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(1987年)。
- (35) 斎藤孝正「猿投窯東山地区における灰釉陶器の様相—東山72号窯出土遺物を中心として—」(『名古屋大学総合研究資料館報告』No. 3, 1987年)。
- (36) 森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6)。
- (37) 森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6), 同「平安時代の磁器型窯業生産」(『貿易陶磁研究』No.12, 1992年)。
- (38) 『考古学ジャーナル』No.211(1982年)巻頭写真ほか。
- (39) 榎崎彰一氏も、この碗Aに相当するとみられる東海産緑釉陶器の模倣対象を越州窯系青磁碗とみなしているようである。ただし、対応させられているのは、森氏と異なり、碗Cに対応するとみられる輪花碗である。榎崎彰一「日本出土の宋元陶磁と日本陶磁」前掲註(29) 48頁。
- (40) 今後、近江の初期段階で灰釉陶器の黒笹90号窯式系譜の器形が確認される可能性は皆無とは言えない。この点は、今後資料の増加を待って検討する必要がある。
- (41) 多治見市教育委員会『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』前掲註(33)。
- (42) 寺島孝一「平安京出土の緑釉陶器」前掲第1章註(10)。
- (43) 秋山進午『和泉漬尾山経塚発掘調査報告書』(和泉市久保惣記念美術館, 1983年)。
- (44) 望月董弘「伊豆修禅寺発見の密教法具」(『三浦古文化』第26号, 1981年, 後に『望月董弘と考古学』(1985年)に所収)。
- (45) 『大日本仏教全集』第46冊〈覚禅鈔第二〉に拠った。なお、この文献については、国立歴史民俗博物館の共同研究「中世食文化の基礎的研究」研究会における名古屋市博物館 野場喜子氏の発表によりその存在を知った。発表後、野場氏からは種々の御教示を受けた。改めて謝意を表します。
- (46) 亀井明德「平安期輸入陶磁器の名称と実体」(『考古学雑誌』第61巻第1号, 1975年)ほか。ただし、青瓷が平安時代を通じて緑釉陶器を指していたかは、問題が含まれると考えており、機会を改めて検討したい。なお、この『覚禅鈔』の場合、「瓷器が荘厳でない」とされているのは緑釉陶器であれば長年の使用による汚れや銀化のためとして理解しやすいため、緑釉陶器とみるべきであろう。
- (47) 前川要氏は、10世紀以降密教法具指向が存在することを認めながらも、それ以前の強い密教法具の指向性を保持したか疑問視しており、むしろ「輸入陶磁器指向」が顕現化し始めるとしている。しかし、逆に今回指摘した緑釉陶器のセットのように、その時期以降に密教法具としてより明瞭なものが見られるようになるのも事実ではないだろうか。なお、美濃の緑釉陶器の組成について密教法具としての六器との関連をみる見解は、既に田口昭二氏により提出されている。前川要「平安時代における東海系緑釉陶器の使用形態について」(『中近世土器の基礎研究』, 1987年), 田口昭二「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」(『考古学ジャーナル』No.211, 1982年)。
- (48) 松澤修「八日市市十禅谷古窯跡出土の緑釉陶器について」前掲第1章註(15), 前川要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」前掲第1章註(18), 日永伊久男「近江の緑釉陶器生産」前掲第1章註(17)。
- (49) 松井政雄氏寄贈の日野町教育委員会所蔵資料には掘田窯で採集された須恵器がある。以前は、作谷窯出土とされていたものである。この資料に関しては、日永伊久男氏より御教示を受けた。感謝申し上げます。日野町教育委員会『日野町内遺跡詳細分布調査報告書』昭和63年版, 前掲註(3)。
- (50) 森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6)。
- (51) (財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度(1986年)。報告書では、文献との対応などから「延喜10年(910)頃から天慶2年(939)頃までの隴」としており、「出土遺構の性格を考えると過大評価することは危険」との但し書きも付している。
- (52) 平尾政幸「平安時代前期の土器」[(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京三条三坊』, 1990年]。
- (53) 森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6)。
- (54) 拙稿「防長産緑釉陶器の基礎的研究」前掲第1章註(4)。

- (55) 森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6)。
- (56) 鹿児島県教育委員会『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(28) (1983年)。
- (57) 鹿児島県立埋蔵文化財センター『本御内遺跡』(1994年)。
- (58) 拙稿「加賀出土の施釉陶器」(『北陸古代土器研究』創刊号, 1991年)。
- (59) 拙稿「防長産緑釉陶器の基礎的研究」前掲第1章註(4)。
- (60) 蒲生町の田井遺跡・野瀬遺跡などで出土している。蒲生町教育委員会『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』I・IV (1989・90年)。

Ⅲ 緑釉陶器生産の技術系譜

(1) 技術系譜をめぐる既往の研究

近江の緑釉陶器生産の技術系譜に関するこれまでの研究を簡単にまとめてみると、大きくみて東海からの系譜とするものと、畿内との関係を重視するものとの2つがある。前者の立場は従来よりみられたもので、近江産緑釉陶器が糸切り後、貼り付けにより高台を作ることから、東海産緑釉陶器との関連性が指摘されていた⁽¹⁾。それに対して後者の見解は、近江において初めて窯体の発掘調査が行われた日野町作谷1号窯の成果を受けて、比較的最近提出されたものである。その主たる論者としては、日永伊久男氏⁽²⁾・前川要氏⁽³⁾が挙げられる。日永・前川両氏の説の発表後としては、東海に系譜を求めるといふ言及がいくつかなされているが、結論を述べる程度であり、いまだこの点に関しては十分に吟味されていないのが現状であろう。

それでは、近江の技術系譜を畿内に求める日永・前川両氏の説の論拠からみていくことにしたい。日永氏は、作谷窯が分焰壁(いわゆるロストル)をもつ特異な窯体構造を持つ点に注目し、構造上類似する窯はいずれも瓦窯である点を指摘する。そして、緑釉瓦などの緑釉製品を生産していた瓦窯がすべて京周辺の官窯である点から、「近江産緑釉陶器の生産において、官営瓦窯の生産技術ないし工人集団の影響が十分に考えられる」としている。また、十禅谷窯跡から緑釉瓦が出土しており、平安京へ近江産緑釉瓦が供給されていた可能性がある点も傍証としている。さらに、『造興福寺記』にみえる永承2年(1047)の興福寺金堂再建においては近江が所用瓦の生産を申し出ているが、当時窯業生産体制を維持していた可能性があるのは、近江南東部の緑釉陶器生産のみであり、緑釉陶器生産工人を動員して瓦生産を行おうとしたとみられ、逆にそのことは「緑釉陶器生産の技術そのものあるいは工人集団には、瓦生産に関する技術ないしは工人集団との交流が内在していたのではないか」という推測も行っている。

一方、前川要氏も基本的に日永氏の挙げた根拠を認め、作谷窯の「窯体構造から見る限り、明らかに瓦窯の影響を受けており、十禅谷窯から緑釉瓦が出土していることを考慮すると、緑釉瓦を主として焼成する瓦陶兼業窯の伝統を持つ京都系洛北窯跡群からの技術伝播の可能性が最も推測し易い」と結論付けている。

畿内系譜説の推論の過程を再整理しておくと、1 作谷窯の窯体構造(図8)は分焰壁を持っており、瓦窯からの影響を受けている。2 十禅谷窯では緑釉陶器だけでなく緑釉瓦の生産も行

っている。3 『造興福寺記』から緑釉陶器生産に瓦生産との関連を推測させる。という3点が具体的な近江の技術系譜を考える材料である。そして、4 緑釉陶器と（緑釉）瓦を生産した瓦陶兼業窯の伝統を持つのは、畿内の洛北窯跡群に限られるという点を根拠に、洛北窯跡群より近江への技術伝播の可能性が推測されているのである。

一方の東海系譜説に関しては、先述の通り高台製作手法の一致などが指摘されている。ただ、畿内系譜説の提示以降にはまとまった論が出されていないため、必ずしもそれとの矛盾を解消させるような細かな議論ではない。

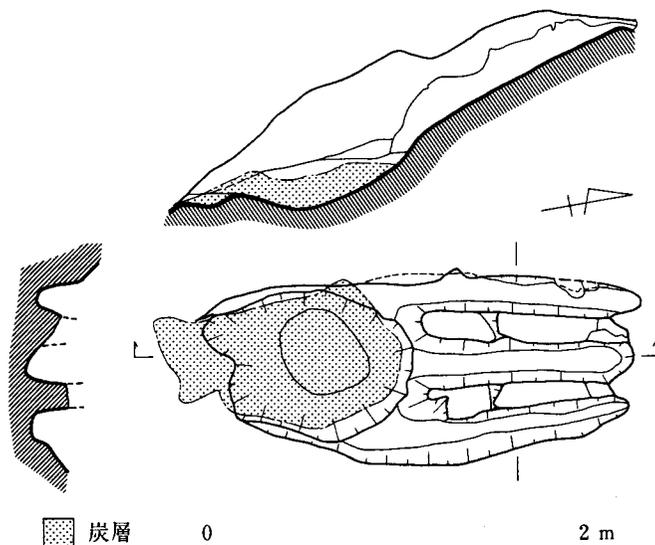


図8 作谷1号窯の窯体構造 縮尺 1/40

（2） 畿内系譜説の再検討

それでは、近江の緑釉陶器生産技術を畿内からの系譜と考える説から再検討を加えることにする。まずは、いくつかの事実確認から始めたい。

第一点は、十禅谷窯において緑釉瓦の生産が行われていたとされている点⁽⁵⁾についてである。管見に及ぶ範囲では、十禅谷窯で緑釉瓦が生産されていたという具体的な根拠が不明である。京都国立博物館所蔵資料には、作谷窯出土とみられる緑釉付着瓦⁽⁶⁾がある。同博物館所蔵資料には十禅谷窯出土の緑釉陶器も含まれていることから、上記の瓦の一部が本来は十禅谷窯採集のものであった可能性はあり、あるいはそこからの判断なのかもしれない。しかし、それらの瓦にみられる緑釉はあくまでごく部分的に点滴として見られる程度で、緑釉瓦として本来施される部位に施釉されているものではなく、破面などにも緑釉が及んでいる。よって、それらが意図的に施釉されたものでないことは明らかであり、緑釉陶器焼成のための焼台として再利用された瓦とみるべきであろう⁽⁷⁾。つまり、十禅谷窯においては少なくとも緑釉瓦の生産されていた明確な証拠は認められないのである。その点は消費地である平安京内の出土資料からも窺え、近江産とみられる緑釉瓦の出土例は知られていない⁽⁸⁾。

次に確認しておきたいのは、『造興福寺記』にみえる永承2年の興福寺金堂再建についてである。この記事から、緑釉陶器生産には瓦生産を内在していたと日永伊久氏は推測するが、そこまで読み取ることにはできないであろう。例えば、丹波では法成寺の建立に当たって瓦生産が行われるが、それ以前に丹波の篠窯跡群で瓦生産が行われていたわけではない⁽⁹⁾。また、この金堂再建

の所用瓦は南都の寺院に付属する瓦工房で生産されることになるのであって、日永氏自身も記す通り、この時期の近江の瓦生産を直接示すものでもない。⁽¹⁰⁾したがって、この資料はとりあえず上記の系譜を考えるための材料からは除外しておくべきであろう。⁽¹¹⁾

このようにみれば、近江の技術系譜を考える具体的な材料は、作谷窯の窯体構造(図8)のみにほぼ絞られるであろう。この分焰壁を持つ構造は、日永氏なども指摘しているように、やはり本来瓦窯に由来するものとみるべきであろう。そして、諸氏により指摘されている通り、緑釉陶器生産地で有牀式の窯が操業しているとみられる地域は、近江における緑釉陶器窯の開窯時期では畿内の洛北のみである。それでは、作谷窯の窯体構造は洛北などの瓦窯と技術系譜的に結び付けられるのであろうか。

まず、洛北の瓦窯の窯体構造をみておきたい。緑釉陶器生産も行われた栗栖野丘陵では、平安後期、12世紀頃の有牀式平窯の瓦窯群が発掘されており(図9-2)、⁽¹²⁾規模は小型ながら床面が平らな通例の平窯構造を採っている。洛北でも西賀茂にはなるが、角社などでは平安前期、8世紀末~9世紀前半の瓦窯群が発掘調査されており、⁽¹³⁾後期のもより規模が大きく、6本の分焰壁を確認できる。また、同じ前期である摂津の岸部瓦窯の平窯も、⁽¹⁴⁾西賀茂と同一の窯体構造である(同一1)。洛北では、近江が開窯したとみられる10世紀段階の瓦窯構造が明瞭ではないため、⁽¹⁵⁾同じ平安京近郊の官瓦窯と考えられる中期の池田瓦窯や森ヶ東瓦窯を見ておくと、⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾前期と同様の有牀式平窯であることがわかる。このようにみれば、同時期の洛北もやはり基本的に同じ構造であったとみるべきであろう。

そうすると、近江作谷窯の窯体は、分焰壁の上面が2段の階段状になっており、しかも床面が傾斜して有牀式の窖窯と呼び得るようなきわめて特殊な構造と判断され、畿内洛北の官営瓦窯の分焰壁を持つ窯の構造とは異質であると言わざるを得ない。作谷窯と同様の窯体構造の窯の存在を平安京周辺の瓦窯で想定するのは困難であろう。また、窯体規模をみると、洛北を初めとする9・10世紀代までの官営瓦窯は幅が3m程で全長も4m前後を測り、分焰壁は6本程度が一般的である。一方の作谷窯は、残存長ながら約2.3mで、最大幅は1.0mと狭く、必然的に分焰壁も2本と少ない。この点でも平安京周辺の官営瓦窯との相違が明確となろう。このようにみれば、作谷窯の窯体構造は有牀式平窯を築いた工人からの直接的な技術系譜とするには異質すぎており、むしろそれは窖窯構造を基本にその改良として一部に分焰壁を取り入れたと考えた方がよいのではないだろうか。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾少なくとも、前川要氏の指摘にあるような洛北の瓦窯からの直接的な技術導入については考え難い。

さらに注意しておきたいのは、畿内における緑釉陶器の生産形態である。重要なのは、洛北などの官営瓦窯にみられるいわゆる有牀式の平窯では緑釉陶器を生産していない点である。洛北の発掘例は多くはないが、10世紀前半(第1四半期頃)の操業と考えられる緑釉陶器窯の栗栖野3号窯は、⁽²⁰⁾床面が階段状をなす通有の窖窯である(図9-5)。また、8世紀末から9世紀初め頃とみられる窯としては栗栖野21号窯・同22号窯などがあり、やはり窖窯である。⁽²¹⁾これら栗栖野の

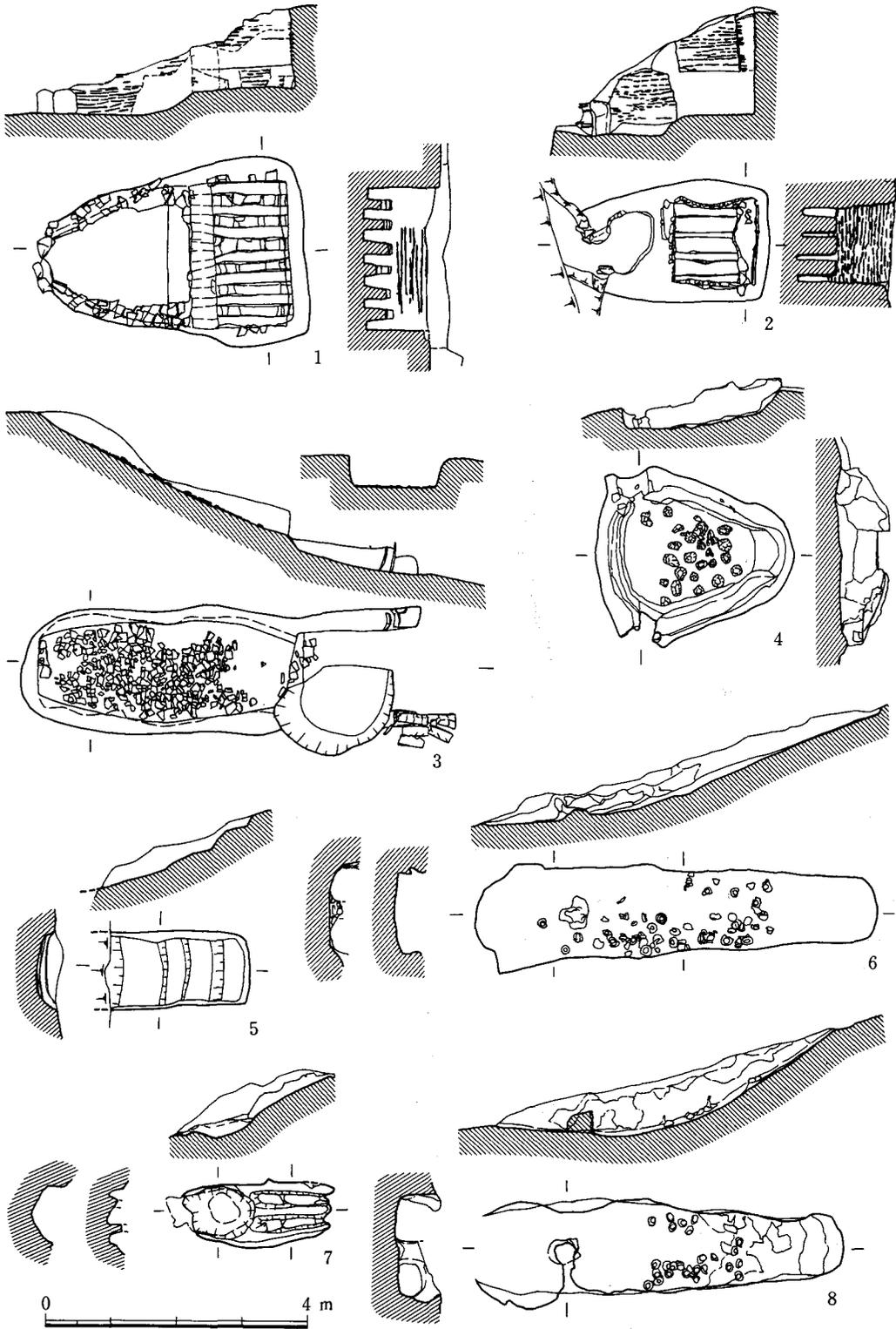


図9 窯体構造の諸例

1 : 岸部H 1号窯, 2 : 栗栖野10号窯, 3 : 岸部N 1号窯, 4 : 前山3号窯, 5 : 栗栖野3号窯,
6 : 黒笹89号窯, 7 : 作谷1号窯, 8 : 大針3号窯 縮尺 1/100

緑釉陶器窯からは施釉品と未施釉品が出土していることから、洛北における緑釉陶器生産は1・2次焼成ともに窖窯を用いるのが基本であった可能性が強い。これは、おそらく洛北以前からの鉛釉陶器の伝統であったとみられ、平安京造営瓦の生産を行ったことで知られる岸部窯でも、緑釉瓦や緑釉陶器などの緑釉製品は窖窯(同一3)で焼成され、併存する有牀式平窯(同一1)では瓦の生産が行われている。⁽²²⁾つまり、ほぼ一貫して緑釉陶器は有牀式平窯を用いないという明確な基準が存在していたとみられるのである。なお、洛北の緑釉陶器生産において、洛西や篠で確認されているいわゆる小型三角窯(同一4)が用いられた可能性は残されている。しかし、その場合でも緑釉陶器生産と分焰壁を持つ構造の窯が結合する要素を持たない。さらに加えておこなうならば、洛北では同じ地域内といえども緑釉陶器生産と瓦生産は、少なくとも9世紀中頃以降は分離してほぼ独立した生産体制を採っていたとみられる。したがって、今後調査が進んだとしても、畿内における緑釉陶器生産において、近江の開窯時期である10世紀前半頃に有牀式の平窯を用いた可能性は想定しにくい。

このようにみれば、分焰壁を持つ窯で緑釉製品を焼成するというのは洛北などの畿内の技術体系からは逸脱するものだと言わざるを得ない。つまり、先の窯体そのものの構造だけでなく、その緑釉陶器の生産技術としても畿内からの直接的な系譜関係を辿ることができない。上記の検討から、緑釉製品を焼成する瓦窯は洛北のみであるという点だけでは、近江の緑釉陶器が畿内の系譜であるとする論拠とはなり得ないことがわかるであろう。

以上、特に作谷窯の窯体構造からの技術系譜論を検討したが、実のところこの畿内系譜説の推論の過程にはいくつかの前提が含まれている。まず第1に、先の畿内系譜説には、作谷窯の窯体構造が近江の緑釉陶器窯としての当初からの一般的な形態であり、特に大きな変化はないという前提が挙げられるだろう。作谷窯は近江の緑釉陶器窯で近江の生産開始当初の窯ではなく、しかも唯一窯体が発掘調査された窯なのである。本来、緑釉陶器の技術系譜を考えるには、近江の最古段階の窯を問題にしなければならないはずであろう。現状での最古段階の窯としては、前章で述べたように梶田窯があるが、この窯の窯体構造はまったく不明である。梶田窯にやや後出するが最古段階に含まれる十禅谷窯の窯体構造は、藤岡了一氏によると「丘陵の中腹に穿たれた概略幅二間(約3.6m—筆者注)、奥行五間(約9.1m—同前)、傾斜約十五度内外の単室登り窖窯で、⁽²³⁾全く小型の須恵器窯と異るところがない」とされており、この記述に従う限り、近江も当初は通有の窖窯であった可能性が強くなるだろう。ただし、正式の発掘調査が行われたわけではないため、その窯体構造の詳細は不明であり、上記の記述の過大評価は避けねばなるまい。

この他には、窯体の調査例がないので、直接的には作谷窯以前の窯体構造を知ることはできない。ただし、それを考える上で、作谷窯よりもやや操業が先行する山の神窯から出土した、いわゆる馬爪形焼台(図3-28)は注目すべきであろう。馬爪形焼台は作谷窯でも出土している(図4-19)が、それと比較すると、形態上異なっていることがわかる。つまり、作谷窯の焼台はいずれも厚みが等しく、上面に対して下面が水平なのに対し、山の神窯の焼台は上面に対して下面

が傾斜しているのである。作谷窯の窯体構造は、先から問題にしているように分焰壁を持つもので、その上面は水平になっている。したがって、製品を焼くために最下段を固定する焼台も当然上面と下面が水平になる。一方の山の神窯の資料は、分焰壁の有無は別にして、少なくとも焼台を設置する面がかなり傾斜していたことを明示するものである。形態的には東海諸窯の馬爪形焼台と共通しており、東海同様の客窯であった可能性が十分高いだろう。少なくとも、山の神窯が作谷窯とは窯体構造が異なっていた点だけは間違いない。先述の十禅谷窯についても、その全長が9mほどであったとすれば、作谷窯の小規模な窯体構造とは異なっていたと言わざるを得ず、やはり作谷窯が近江の典型的な窯体構造かは疑問となるだろう。要するに、近江の緑釉陶器窯では作谷窯に至るまでには構造上の変化があったとみられ、近江の開窯時においても分焰壁を持つ⁽²⁴⁾いたかは定かではないのである。

たとえ近江の窯構造に開窯当初から分焰壁を持っていたとしても、畿内系譜論の推論においては、もう1つの仮定が含まれている。それは、緑釉の技術が瓦の製作工人を含めて一括してもたらされたという前提である。瓦生産と関連を持ちつつ緑釉陶器生産を行っているのは確かに平安時代では洛北しか認められないが、緑釉施釉技術と瓦窯の有床式の構造が同一地域からの系譜かは実のところ別に証明を要するのである。

このように、畿内系譜説において挙げられた根拠からは系譜を辿ることができず、その推論の過程としてもいくつかの解決されていない前提を含んでいると言える。そこで次節では、畿内系譜説の主たる根拠とされた作谷窯の特異な窯体構造をひとまず検討対象からはずし、それ以外の近江の緑釉陶器生産に関わる技術そのものを検討することによって、改めて系譜を考えることにしたい。

(3) 生産技術の系譜

それでは以下、近江の緑釉陶器そのものを対象として、できる限り網羅的に畿内や東海などの緑釉陶器と比較検討を行うことにする。

まず、成形技術であるが、近江産緑釉陶器は回転糸切り後、高台の製作技法として貼り付け手法を採用している。畿内諸窯ではこの時期には削り出し高台を用いており、それとは明らかに異なる。したがって、従来から指摘のあるように、東海諸窯など畿内以外の緑釉陶器生産地と共通しているものといえる。

器形は、前章で検討した通り、近江産緑釉陶器の場合大きく3種の碗形態が存在し、そのそれぞれが東海産緑釉陶器と共通している。畿内では、10世紀には体部中位で屈曲する稜碗形態が一般的であり、近江や東海・防長のものとは明瞭に異なっている。また装飾手法としては、近江では口縁端部を指やへらで押圧するものとへらで切り込むものが存在する。畿内諸窯では押圧する輪花しか確認できないのに対して、東海ではその両者が存在しており、近江の様相と一致する。また、近江では口縁部のみの輪花と体部にも細長く施す輪花が存在するが、畿内では前者のみし

か確認できないのに対し、東海では両者がみられる。

焼成技術に関しては、近江では窯道具として、三叉トチンと馬爪形焼台を用いている。畿内諸窯では9世紀後半頃から三叉トチンを用いず、直接の重ね焼きに移行している。一方の東海諸窯は三叉トチンを一貫して使用している。また馬爪形焼台は東海における施釉陶器生産通有の窯道具である。さらに、近江では一般に色見と呼ばれる、緑釉の部分的に付着した破片が出土する。これは東海諸窯、特に東濃など10世紀以降にはよく認められる出土品であるが、一方の畿内においては現状では確認されていない。

施釉範囲では、近江には全面施釉と底部外面に施さない部分施釉が存在するが、特に古い段階では前者が主体とみてよいだろう。その点を東海や畿内と比較すれば、畿内ではこの時期には既にほぼすべて部分施釉に移行しており、一方の東海では原則的に全面施釉を維持している。部分施釉を通有にする畿内のような技術体系から全面施釉が生まれたことは考えにくく、この点でも近江は東海諸窯からの技術導入の方が想定しやすい。釉調にしても、近江と10世紀の東海産は破片では区別し難いほど酷似するものがある。

上記の検討から、近江の緑釉陶器生産技術は畿内の生産技術とは全く異質であることが明らかであろう。近江の技術的な諸様相は、東海諸窯との共通性がきわめて高く、その技術の中で理解できるものと言える。つまり、近江の緑釉陶器生産技術は東海系の技術をかなり一括的に導入した可能性が高いと判断されるだろう。

ただし、それでは近江の緑釉陶器の生産開始には東海から直接的に緑釉施釉技術を移入したかという点、いまだ若干の検討の余地がある。実は、混乱を招きかねないためあえて先には触れなかったが、洛北では中の谷4号窯という窯が発掘されている⁽²⁵⁾。その窯は灰釉陶器を主体に緑釉陶器も焼成しており、その製品から窯体構造に至るまでのすべての側面において東海（特に東濃）系といえるもので、伝統的な畿内の技術体系とはまったく異質である。中の谷4号窯は、工人を伴い東海から一括して技術を導入して操業された可能性が強い。その操業時期は、東濃の灰釉陶器編年では虎溪山1号窯式に当たり、実年代では10世紀後半～11世紀初め頃となる。これは、近江の開窯時期よりは少し遅れるとみられるため、この窯自体から近江における緑釉陶器生産の開始を考えることはできない。

しかし、もしも洛北において近江の開窯期である10世紀前半代に遡って中の谷4号窯と同様の東海系技術を持つ窯が発見されるとすれば、東海系の技術が洛北を経由して近江に導入されたことも考えられなくはない。したがって、技術としてはあくまでも東海系ながら、具体的な導入過程としては、東海からの直接的な導入と洛北などを經由しての導入の2つの可能性があることになる。そのいずれかを断言するのは困難ながら、洛北では10世紀前半頃には緑釉陶器専焼窯である栗栖野3号窯⁽²⁶⁾が存在しており、その時期に東海系の緑釉陶器窯が併存していたことはやや想定し難いように思われる。よって、近江には東海からの直接的技術導入を考えるのが現状としては最も穏当なところであろう。

導入経路は留保するとしても、近江の技術系譜の遡源が東海に求められる点は確実である。ただし、近江の緑釉陶器生産には東海と異なる要素も存在する。特にここで注意したいのは、その生産内容あるいは生産形態についてである。東海の緑釉陶器生産では灰釉陶器との併焼を原則としており、少なくとも在地での灰釉陶器生産の基盤の上に緑釉陶器生産が営まれている。ところが、近江では先に述べたように灰釉陶器の生産は行われておらず、在地技術による須恵器を併焼している。近江における緑釉陶器生産の開始当初の窯が確認されていない現状では断定し難いものの、近江在地の須恵器工人を動員して、緑釉陶器生産が開始された可能性が強い。となると、洛北にみられた東海系の窯とは異なる在地工人主体の技術導入と推測されよう。

それでは、先ほどひとまず議論から外しておいた作谷窯の有牀式の窯体構造の出現については、どのように考えるべきであろうか。まず、諸先学が指摘するように、分焰壁を取り入れていること自体には瓦生産との関係を想定するのが妥当である。しかし、既に明らかにされているように、緑釉陶器技術の遡源である東海の緑釉陶器生産地では、緑釉陶器の生産時期に分焰壁を持つ窯体構造の窯は確認されておらず、燃焼部と焼成部の境に分焰柱をもつ窯構造である(図9-6・8)。また、瓦の生産も行われていない。そうすると、この窯体構造の系譜は東海に求めることはできず、東海系の技術とは別に部分的に取り込まれたと考えざるを得ない。

日永伊久男氏は作谷窯と同様の窯体構造の類例を集成しており、その結果類例はかなり全国各地に認められるが、作谷窯とは年代差が大きいため、直接の祖型を断定することは現時点では不可能だとしている。⁽²⁷⁾もちろん、今後近江の祖型となるような窯が発見される可能性は皆無ではない。だが、上記の日永氏による類似形態の諸例なども、一元的な技術伝播というよりは在地須恵器工人が瓦生産技術を取り入れて独自に生み出したものと想定した方が良からう。先に述べたように近江の緑釉陶器生産が在地須恵器工人を主体とする生産体制とみるならば、おそらくその窯体構造も在地工人が瓦生産技術を取り入れたことにより生まれた変異形態である可能性が十分に考えられるだろう。そうすると、近江の須恵器あるいは緑釉陶器の工人がなんらかの形で瓦生産窯の分焰壁という構造の知識を入手できる状況さえ明らかになれば、その窯体構造が成立するために必要な条件が整うことになる。

それでは、具体的にどの地域にその瓦生産技術、特に分焰壁の系譜を求めることができるであろうか。上述のように、作谷窯が近江の緑釉陶器生産工人の独自の発想により成立したものとすれば、直接の祖型がないことになるから、その系譜を特定するのはかなり困難となる。本稿ではその点の結論までは立証できないものの、いくつかの可能性は提示しておきたい。まず、東海系技術を洛北を経由して取り入れたとすれば、洛北の瓦窯の有牀構造を導入しうる可能性はある。ただし、先に触れたようにその時期に洛北で東海系の窯が存在したと考え難い点や、近江においても開窯当初から分焰壁を持っていたかが疑わしい点から、洛北を経由したことによる知識の入手を考えるには問題が残されるところである。

そこで、もう1つの想定として、近江国内部の瓦生産地から技術を取り入れたとする仮説を提

示したい。というのは、近江の緑釉陶器生産に当たって、その技術とは別に、緑釉陶器生産に不可欠ではない分焰壁だけを他地域の瓦生産部門から取り入れたとは考えにくいためである。

まず、近江の緑釉陶器生産地内での瓦生産の状況だが、現状では有牀式の構造の瓦窯は確認されていない。ただし、金折山窯跡の第5トレンチ第2灰原の出土品は⁽²⁸⁾圧倒的に瓦が多いため、斜面上方に瓦窯が存在したことは確実である。年代については、9世紀に下るものではなく、近接する須恵器窯とほぼ同時期で、8世紀後半には瓦生産が行われていたであろうと推測されている。ただ、報告でも記されているように、含まれる土器が少量で年代の決め手にはならず、その年代推定も平瓦のみからのものであり、操業年代を限定するのが困難なところであろう。また、作谷窯では発掘においては出土していないものの、先述のようにその窯の付近で瓦が採集されており、その瓦には緑釉の点滴がみられる。これも時代が不明ながら、少なくとも作谷窯の操業以前に付近で瓦生産が行われていたのであろう。このように、緑釉陶器生産地周辺でも瓦生産が行われていたとみられ、有牀式の瓦窯が操業していたことは十分に考えておく必要がある。問題は、その瓦生産が平安時代、特に近江における緑釉陶器生産の操業期、あるいはその開窯直前段階まで行われていたかであるが、調査の乏しい現段階では不明と言わざるを得ない。

このように、緑釉陶器生産地である蒲生窯跡群における平安期の瓦生産の状況は不明である。しかし、有牀構造の平窯は既に8世紀の後半頃には全国各地に広がっており、近江もその例外ではない。例えば、近江国衙や寺院などが集中する湖南や湖西南部の地域では、平安時代の有牀式の平窯も発見されている。⁽²⁹⁾ただ、それらの操業時期は9世紀中葉頃までと考えられており、もしそうだとすれば近江の緑釉陶器窯の有牀構造と直結することは難しいかもしれない。しかし、10世紀代頃まで下ると推測される瓦が近江国衙などでごくわずかながら出土している⁽³⁰⁾ことから、生産は少ないとしても瓦窯なりその技術が近江の在地内に存続していた可能性は十分に想定されるだろう。このようにみえてくれば、近江の内在的要因から窯に分焰壁を取り入れたとする仮説も十分に成り立ちうるものと思われ、むしろその仮説の方が特異な緑釉陶器焼成窯である点とも矛盾なく捉えることができるのではなかろうか。

以上、近江における緑釉陶器生産の技術系譜について考察を試みてきた。結論とすれば、近江の緑釉陶器生産の技術は、作谷窯の窯体構造を除けば、ほぼすべてにわたって東海系と判断されるのである。具体的な技術伝播の経路としては、洛北を経由する可能性も残されるものの、東海からの直接的導入とみるのが現状ではより妥当であろう。残された作谷窯の窯体構造に関しては、他地域から緑釉技術と別に取り入れたことも考えられなくないが、近江在地の瓦生産技術をヒントに近江内で独自に生み出されたものであった可能性を1つの仮説として提示したい。

註

- (1) 寺島孝一「平安京出土の緑釉陶器」前掲第1章註(10)、田路正幸「近江産」緑釉陶器の一樣相」前掲第1章註(19)。
- (2) 日永伊久男「近江産緑釉陶器の生産体制について」前掲第1章註(17)。

- (3) 前川要「平安時代における緑釉陶器の編年の研究」前掲第1章註(18)。
- (4) 森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6), 橋本久和「土器研究と陶磁器」(『中世土器研究序論』, 真陽社, 1992年), 小森俊寛「概要」(古代の土器研究会『都城の土器集成Ⅱ』, 1993年)注3, ほか。
- (5) 丸山竜平「滋賀の古代窯」前掲第1章註(12), 同「緑釉陶器窯の出現」前掲第1章註(12)。
- (6) 五島美術館『日本の三彩と緑釉』前掲第2章註(42), 原色図版94。
- (7) 瓦の焼台としての利用は, 周防などでも行われている。拙稿「防長産緑釉陶器の基礎的研究」前掲第1章註(4)。
- (8) 吉村正親「日永伊久男氏の「近江産緑釉陶器の生産体制について」を読んで」(中世土器研究会『中世土器研究』第57号, 1989年)ほか。
- (9) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第2冊(1984年), 同『京都府遺跡調査報告書』第11冊(1989年)。
- (10) 吉村正親氏は、『造興福寺記』にみえるのは近江の国司が再建事業に加わることを申し出たのであって, 所用瓦の生産に加わろうとしたのではないとしている。ただ, 2月13日の記載には諸国が各々の本国において金堂所用瓦の焼造を申し出たとされており, 金堂再建に割り当てられていた近江がそれに含まれていた可能性もあるだろう。吉村正親「平安京城出土瓦とその生産—特に院政期を中心として—」(『中近世土器の基礎研究』Ⅲ, 1987年), 同「日永伊久男氏の「近江産緑釉陶器の生産体制について」を読んで」前掲註(8)。
- (11) 後述するように, 近江の緑釉陶器生産に瓦生産との関連が指摘できる点は筆者も認めており, その点までも否定するわけではない。
- (12) (財)京都市埋蔵文化財研究所『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和60年度(1986年)。
- (13) (財)古代学協会『西賀茂瓦窯跡』(『平安京跡研究調査報告』第4輯, 1978年)。
- (14) 大阪府教育委員会『岸部瓦窯跡発掘調査概報—吹田市小路—』(1968年)。
- (15) 栗栖野では他にも1930年に調査された栗栖野1・2号窯がある。1号窯については, 明瞭な操業時期が不明ながら, 「栗」字を中央に配した軒平瓦が出土しており, あるいは平安中期頃(9世紀後半～10世紀)の窯なのかもしれない。分焰壁(ロストル)は本来6本を持っていたものと見られ, 焼成室が幅約2m, 奥行き約1.5mであり, 平安前期～中期頃の窯と同様のものである。この窯についても, やはり一般的な平窯構造である。京都府『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第15冊(1934年)。
- (16) 大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』(1984年)。
- (17) (財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度(1987年)。
- (18) 吉村正親氏は, 作谷窯の窯体構造について「より効率よく焼成するために考えられた須恵器窯」と主張しており, 筆者も基本的にこの吉村氏の考え方に同意するものである。ただし, 吉村氏も平安京近郊の伝統的な緑釉陶器あるいは須恵器の窯との関係を想定しており, その点では筆者の考えと異なる。吉村「日永伊久男氏の「近江産緑釉陶器の生産体制について」を読んで」前掲註(8)。
- (19) 前川要「平安時代における緑釉陶器の編年の研究」前掲第1章註(18)。
- (20) (財)京都市埋蔵文化財研究所『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和60年度, 前掲註(12)。
- (21) (財)京都市埋蔵文化財研究所『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』平成4年(1993年)。
- (22) 大阪府教育委員会『岸部瓦窯跡発掘調査概報—吹田市小路—』前掲註(14)。
- (23) 藤岡了一「奈良・平安時代の施釉陶」前掲第1章註(8)。
- (24) 10世紀後半頃に操業された篠窯跡群の西長尾5号窯では, 畿内の緑釉陶器窯で採用されていた小型の三角窯の系譜を引きながら, 支柱を用いた有林式の構造を採っている。作谷窯も西長尾5号窯に近い時期の操業であり, 伝統的な窯体構造に各地の状況に合わせた改良が試みられたものとして, 共通の位置づけが与えられるかもしれない。なお, 橋本久和氏は, 篠窯と近江(本稿の蒲生)窯が共通して小型の窯である点を中世の先駆形態とみなし, 古代末(10世紀後半～11世紀前半頃)の特徴と判断している。しかし, 篠の小型三角窯自体は洛西の緑釉陶器窯(9世紀後半)に系譜を辿ることができ, 当該期の共通特徴とみなすべきではない。むしろ筆者の想定する窯構造の改変の方が, 古代的な伝統からの脱却という点で, 中世の先駆の様相としてより評価しうるのではなからうか。(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第2冊, 前掲註(9), 橋本久和『中世土器研究序論』前掲註(4), 360・361頁。
- (25) (財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』(1989年)。

- (26) (財)京都埋蔵文化財研究所『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和60年度, 前掲註(12)。
 (27) 日永伊久男「近江産緑釉陶器の生産体制について」前掲第1章註(17)。
 (28) 日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集, 前掲第2章註(3)。
 (29) ロストル式の平窯としては、長尾瓦窯・野畑瓦窯などがみられる。林博通「長尾瓦窯」(『榎木原遺跡発掘調査報告書』Ⅲ, 1981年), 林博通「長尾遺跡」(小笠原好彦ほか『近江の古代寺院』, 真陽社, 1989年), 林博通・三宅弘「近江国庁関連の官衙跡 野畑遺跡」(『滋賀文化財だより』No.73, 1983年), 林博通「近江国分寺に関連する発掘調査」(『新修国分寺の研究』第3巻<東山道と北陸道>, 吉川弘文館, 1991年)。なお, 他に奈良時代末から平安時代の操業とみられる瓦窯として、榎木原2号窯・南郷田中瓦窯・石居瓦窯などがある。滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『榎木原遺跡発掘調査報告一南滋賀廃寺瓦窯一』(1975年), 林博通・葛野泰樹「瀬田堂ノ上遺跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度(1975年), 辻広志「遺物(瓦・磚など)」(滋賀県教育委員会『滋賀文化財調査報告書』第6冊, 1977年), 杉山信三ほか「瀬田廃寺発掘調査報告」(滋賀県『滋賀県史蹟調査報告』第12冊, 1961年)。
 (30) 辻広志「遺物」前掲註(29)。なお, 長尾瓦窯では瓦窯の構築のために奈良末～平安前期の瓦が利用されており, その瓦の中には流雲文縁軒丸瓦が含まれている。その流雲文縁軒丸瓦の一種は, 堂の上遺跡において承和11年(844)6月の銘を持つ平瓦・丸瓦とともに出土しており, 曲率からその平瓦や丸瓦と対応させることができると判断されるため, この瓦窯の上限を大略押さえることができる。林博通氏は, 長尾瓦窯を9世紀前葉～中葉に置いているが, あるいはもう少し時期が下がる可能性もある。今後の瓦の研究の進展を待ちたい。林博通「長尾瓦窯」前掲註(29)。

Ⅳ おわりに

本稿では、近江の緑釉陶器生産に関わる諸側面のうち、窯の分布、生産内容、技術系譜、編年、製品の流通などの問題点を挙げた。これまで意見の分かれていた論点や、逆に確実視されてきた、あるいはされようとしている事項について、筆者なりに総点検を加えたつもりである。本稿の確認事項ならびに検討結果を改めて列記すると、以下のようになる。

緑釉陶器窯とその分布：1 近江の緑釉陶器窯としては、7遺跡が知られていたが、これまで須恵器窯として認識されてきた梶田窯も緑釉陶器生産窯として新たに加えることができる。2 現在確認できる近江の緑釉陶器窯跡は、1つの窯跡群としてまとめることができると考えられ、本稿では「蒲生窯跡群」と呼称することにした。3 蒲生窯跡群は現状では、日野川を境に布引山地区と水口地区に大きく2分でき、後者は日野町の中山支群と水口町の春日支群に細分されるという地区設定ができる。

緑釉陶器窯での併焼品目：1 近江の緑釉陶器窯では灰釉陶器の生産は行われておらず、従来灰釉陶器と認識されていた椀・皿・瓶は灰釉陶器模倣の須恵器である。2 須恵器の生産は、梶田窯などからみて、おそらく近江の開窯期から行われていたものとみられ、10世紀末頃からは緑釉陶器との併焼もされなくなるようである。3 緑釉瓦の生産が従来指摘されていたが、緑釉陶器焼成時の焼台として瓦が転用された例はあるが、緑釉瓦そのものの生産は認め難い。

近江産緑釉陶器の特徴：1 近江産緑釉陶器は、成形・焼成の諸技術や器形・装飾法など基本的な面では東海産緑釉陶器とほぼ一致している。2 東海産緑釉陶器との差異は、近江においては粗雑化の傾向がより強く、器形などの分別が不明瞭である点が挙げられ、近江の独特な高台と

共に近江の在地化傾向として捉えられる。3 緑釉陶器の器形の模倣対象は、これまで越州窯系青磁が想定されていたが、越磁に限らず、金属製品を模倣したものも存在する。

緑釉陶器の技術系譜：1 近江の緑釉陶器生産技術は、畿内とは明らかに異質であり、窯体構造を除けばすべて東海と一致することから東海系である。2 技術の導入経路としては、東海からの直接的な導入と、畿内の洛北などを經由した流入が想定されるが、洛北の10世紀前半の状況からみて、現状では前者を考えるのがより妥当である。3 作谷窯の分焰壁を持つ窯体構造は、基本的に近江の緑釉陶器・須恵器工人による変容形態であると判断され、近江の開窯時からの構造かは不明である。4 分焰壁の由来は、洛北などからの知識受容も考えられなくないが、むしろ近江在地の瓦窯構造から部分的に取り入れた可能性を想定した方が理解しやすい。

編年・生産の展開過程：1 近江の緑釉陶器窯は、開窯が10世紀第1四半期にまで遡るかは今後の資料増加を要するが、概ね10世紀前半から11世紀前半頃まで存続する。2 今回初めて取り上げた梶田窯は、現状では最古段階の窯である可能性が高い。3 従来の窯の編年では一系列的な編年観が示されていたが、現状で確認できる3支群は、少なくとも10世紀後半頃には併存しつつ操業を行っていたとみるべきである。

製品の流通：1 陸奥から薩摩・大隅までというように全国的に流通しているが、西日本への流通量が多く、特に平安京への供給が主体である。2 10世紀後半頃からそれまで畿内産が主体であった地域を中心に近江産が取って代わるような形を採っている。3 近江の主な役割は畿内に代わる立場で緑釉陶器を生産することにあつたとみられる。

上記の論点のうち、模倣対象の問題についてももう少し触れておきたい。平安時代の土器・陶磁器については西弘海氏により「磁器指向」として総括され、奈良時代までの「金属器指向」と対比的に捉えられており、それがかなり定説化していたかの観がある。しかし、筆者もごく簡単に指摘したように、9世紀の東海産の緑釉陶器や灰釉陶器では、少なくとも金属器指向が強いとみるべきである。⁽¹⁾ 比較的最近の森隆氏による論考でも、9世紀に入って磁器模倣が発現しつつも、依然金属器指向が強い段階としており、9世紀初頭段階での金属器から磁器への全面的な指向の転換は問題視されるようになってきたものと言える。⁽²⁾ ただし9世紀以降については、森隆論文にみえるように、9世紀後半頃から磁器型食器の普及が大規模かつ広範囲に進行し、10世紀後半には旧来の金属器型の器種は完全に払拭されるという流れで捉えられている。しかし、今回検討したように、10世紀以降の緑釉陶器生産においても金属器指向は認められるのであって、越磁模倣という一面のみでは捉えきれないことを示すことができたのではなかろうか。平安時代の磁器模倣は確かに認められ、それが奈良時代以前に認められない新しい動きであることは間違いない。しかし、従来あまりにも磁器型、磁器指向という側面が重視され過ぎていたように思われる。平安時代にあつても、金属製品を頂点とした食器構成の階層性を考えなければならぬ。⁽³⁾

最後に、これまでの検討結果をまとめて近江の位置を確認しておくことにする。近江の緑釉陶器生産技術は畿内の伝統的な生産技術ではなく、あくまで東海系のものである。しかしその一方

で、その生産は在地の須恵器工人が主体となり、灰釉陶器生産を伴わない点で東海諸窯とは異質な生産体制である。そこには、単なる東海からの自然な技術拡散というより、緑釉陶器生産窯として再編成された生産体制であることが読み取れよう。それは、流通状況からみても窺われ、近江の基本的な役割は東海産の流通域への供給ではなく、畿内の緑釉陶器生産に取って代わる立場となることであった。つまり、近江の緑釉陶器生産は、技術系譜としての東海、主要供給域としての畿内、生産主体としての近江在地という大きく3要素から構成されることになり、その地理的な位置と対応するかのごとく、東海・畿内・近江の3者が組み合ったところに存立した生産であったと言えるだろう。そして、逆にそこにこそ、近江において緑釉陶器生産地が成立した素因を見いださうるのではなかろうか。

本稿は、防長地域を取り上げた前稿を承けて、2番目の基礎的作業としてまとめたつもりである。ただ、本稿で論じ残した問題点も少なくない。それらの問題の多くは近江だけで解決するものではないので、今後他の生産地を含めて考察を深めていきたいと考えている。

註

- (1) 西弘海「土器様式の成立とその背景」(『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』, 1982年)。
- (2) 拙稿「施釉陶器の模倣対象—磁器か金属器か—」(『歴博』第55号, 1992年)。
- (3) 森隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」前掲第1章註(6), 同「平安時代の磁器型窯業生産」前掲第2章註(37)。
- (4) 奈良時代から平安時代への施釉陶器における器形の変化は、模倣対象という面では中国指向への傾斜として捉えることができるかもしれない。

付記

本稿の一部は京都大学大学院演習ならびに考古学研究室研究会にて発表を行った。その際には、小野山節先生を初め、研究室の諸学兄にご指導いただいた。また、本稿をなすに当たり多くの方々から種々の御教示を受け、各地の資料の実見に当たっても多々便宜を図っていただいた。末筆ながら、御芳名を記し、感謝の意を表します。

秋田裕毅, 稲垣正宏, 宇野隆夫, 尾野善裕, 小森俊寛, 斎藤孝正, 田口昭二, 富田逸郎, 中嶋隆, 中村敦, 中村和美, 難波洋三, 野場喜子, 畑中英二, 菱田哲郎, 日永伊久男, 平尾政幸, 前川要, 松澤修, 森郁夫, 森隆, 吉岡康暢, 若尾正成(敬称略)。

挿図出典一覧

図面はすべて筆者が再トレースを行っている。図の統一上、一部改変を行ったが、報告者の意図に反するものがあれば、お許しを乞う次第である。なお、筆者の実測によるものについても、参考としてその資料の報告された文献を掲げた。

図1 筆者作成。

図2 松澤修氏の全面的な御教示のもとに、筆者作成。

図3

- 1・2: 滋賀県日野町教育委員会『日野町内遺跡詳細分布調査報告書』昭和63年度版(1989年)図版28—G7・G8。
- 3: 筆者実測。上掲書。
- 4: 筆者実測。滋賀県日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集(1985年)図版17—G1。
- 5・6・9~16: 松澤修「八日市市十禅谷古窯跡出土の緑釉陶器について」(『財』滋賀県文化財保護協

会『滋賀文化財だより』No.130, 1988年) 2 図・3 図—1・10・17・19・2・3・21・20・29・28。
7・8:筆者実測。上掲書。
17~24・26~28:(財)滋賀県文化財保護協会『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』(1975年) 図版44—
13・15・7・12・10・16・3・2・17, 図版45。
25:筆者実測。上掲書。

図4

1:筆者実測。京都国立博物館所蔵品。
2・6・9・12・13・15・16:筆者実測。京都大学所蔵品。京都大学文学部『京都大学文学部博物館考
古学資料目録』第2部(1968年)。
3:筆者実測。滋賀県日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第6集(1989年)。
4・5・8・10・11・14・18・19:上掲書, G43・G51・G47・G24・G23・G67・ト4・ヤ1。
7・17:滋賀県日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集(1985年) G5・G8。
20~34:滋賀県立近江風土記の丘資料館『近江出土の施釉陶器 実測図集成Ⅱ』(1988年) 600・619・
614・557・661・665・555・594・576・650・652・651・641・571・675。

図5 筆者作成。

図6

1:(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和61年度(1987年) 図25—75。
2:多治見市教育委員会『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』(1981年) 図版60—7。
3:滋賀県日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集(1985年) 図版17—G8。
4:筆者実測。小牧市教育委員会『桃花台台線開発事業地区内埋蔵文化財発掘調査報告書』(1987年)。
5:京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅱ 1976年度(1980
年) 図版107—49。
6:斎藤孝正「猿投窯東山地区における灰釉陶器の様相—東山72号窯出土遺物を中心として—」(『名古屋
大学総合研究資料館報告』No.3, 1987年) 図3—2。

図7

1:亀井明德「日本出土の越州窯陶磁器の諸問題」(『九州歴史資料館研究論集』1, 1975年) 第1 図—
7。
2:九州歴史資料館『大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報』(1982年) 第60図—50。
3・4:森隆「平安時代の磁器型窯業生産」(『貿易陶磁研究』No.12, 1992年) 第3 図—10・11。
5:(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和61年度(1987年) 図24—56。
6:筆者実測。(財)長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩
尻市内その2—』(『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』3, 1989年)。
7:森隆「近江地域出土の古代末期の土器群について」(『中近世土器の基礎研究』Ⅵ, 1988年) 第5 図
—8。
8:筆者実測。多治見市教育委員会『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』(1981年)。
9・10:同上, 図版60—10・14。
11~13:秋山進午『和泉槇尾山経塚発掘調査報告書』(和泉市久保惣記念美術館, 1983年) 第11図1・2。

図8 滋賀県日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第6集(1989年) 第7 図。

図9

1・3:大阪府教育委員会『岸部瓦窯跡発掘調査概報—吹田市小路—』(『大阪府文化財調査概要』1967
年度7, 1968年) 図版第6・第8。
2・5:(財)京都市埋蔵文化財研究所『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和60年度(1986年) 図19・12。
4:(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『篠窯跡群』Ⅱ(『京都府遺跡調査報告書』第11冊, 1989年)
図版第二。
6:愛知県教育委員会『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』(1) (1980年) 第11図。
7:滋賀県日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第6集(1989年) 第7 図。
8:岐阜県多治見市教育委員会『一般国道248号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(『多
治見市埋蔵文化財発掘調査報告書』第7号, 1987年) 第15・16図。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

The Green-glazed Ware of *Ōmi* in the Heian Period

TAKAHASHI Teruhiko

The green-glazed ware, which was goods of higher grade in the Heian period, was produced in four districts; *Kinai*, *Tōkai*, *Ōmi* and *Bōchō*. In this paper, I re-examine the production in the *Ōmi* district. The major results are as follows.

Other items fired in the green-glazed ware kilns: ash-glazed ware was not produced, and all that was fired together in the kilns was Sueki ware. Also the production of green-glazed roof-tiles cannot be ascertained.

Characteristics of the products: the *Ōmi* ware can be characterized in two points, that the green-glazed ware of *Ōmi* and *Tōkai* is much the same in terms of technique, form, and so on; but in comparison with the green-glazed ware of *Tōkai*, the *Ōmi* ware takes on more of the local color, and has a stronger tendency to be coarse.

Models for the shape of the ware: it can be pointed out that the shape of a certain bowl, which made up the major type of the *Ōmi* ware, was copied not from Chinese ceramics but from metal products. So imitation of metal ware can also be seen in the green-glazed ware of the 10th century and onwards, and we should not understand that the style of Japanese ceramics and pottery produced in the Heian period was solely modelled on Chinese ceramics.

Technical genealogy: techniques of the *Ōmi* ware is clearly different from that of *Kinai*, and apart from the structure of the Tsukuriya Kiln it can be understood to be the techniques of the *Tōkai*. The writer conjectures that the structure of the *Tsukuriya* kiln was a result that green-glazed ware potters of *Ōmi* picked up the techniques used for the production of roof-tiles within the *Ōmi* district and improved them to a style suited to the firing of green-glazed ware.

Transition of production: it is almost certain that the production of the *Ōmi* ware started in the first half of the 10th century, and in the second half of the 10th century the kilns of the three groups recognised today were operated in coexistence and produced on a relatively large scale.

Circularion of the product: in the areas where *Kinai* ware got majority in consumption of green-glazed ware up to the mid-10th century, the ware dating from after that time was almost all *Ōmi* ware. For this reason, it is evident that *Ōmi* played a main role in the production of green-glazed ware as a replacement for *Kinai*.

The historical background of *Ōmi* in the light of the results given above; while the local craftsmen in *Ōmi*, basically introduced the technique of green-glazed ware from the *Tōkai* district, the products of *Ōmi* took the place in the market of *Kinai* green-glazed ware. The production of *Ōmi* green-glazed ware can be understood from the essential elements of *Kinai* and *Tōkai*, which are neighbor provinces of *Ōmi* and made many products in 9th century. And that suggests the reason why in the first half of the 10th century the production of green-glazed ware was started in *Ōmi*.